

---

# 月には猫が住んでいる

かんだた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月には猫が住んでいる

### 【Nコード】

N6347I

### 【作者名】

かんだた

### 【あらすじ】

マキです。俺の友人は女に甘い。高校では改めてやらねばと決意したそのとき、すでにやつはこの馬の骨とも知れない金髪との同居生活をスタートしていた。抵抗むなく自宅を占領された友人に對して、俺はいったい何をしてやれるんだろうか……。ひとこと言わせてもらおうなら、とりあえず俺に謝れと。

## マルマル、請われて家に招かれる（前書き）

はじめまして、かんだたです。

この物語は、短編連作という形式をとる予定です。  
気楽に読んで頂きたいので、前書きと後書きは極力なくそうと思  
います。  
怠惰な作者ですが、それでもよろしかったらご一読をして頂きたく  
存じます。

## マルマル、請われて家に招かれる

色々あつて地球に漂着したマルマルは、貧しさに負けそうだ。

空腹に耐えかね、綿密な調査のすえにこれはと目を付けたお人好しの目の前で行き倒れる計画を実行に移す。

作戦は完ぺきに思われたが……？

嗚呼と憊くづめいて、よよと歩道に倒れ伏す。我ながら完ぺきな演技だった。

「……………」

それを冷たく見下ろしているのは、ターゲットの少年である。手元のデータによれば、平和ボケした日本という国（でもお金はある）の、とある田舎で老夫婦と一緒に暮らしている。生後15年の原住民である。

（勝った……！）

わたしは確信したが、彼は不意に視線を最寄りの電信柱に移し、そしてそのまま脇道に逸れようとする。小芝居をまじえた、まあ完ぺきと言えるだろうスルースキルだった。

さすがにシュミレーション不足だったことは否めない。道端に美少女が落ちているというシチュエーションは、ちよつと考えたら現実

にはありえないからだ。わたしは悪くない。

(逃すものか)

わたしは素早く路上を這って、少年の足首を鷲掴みにした。走って逃げなかったのが、おまえの敗因だ。

「……………」

少年は、虫けらを見るような目でわたしを一瞥してから、はたと思いつたように周囲を見渡し、慌ててわたしを助け起こそうとする。良心の呵責に耐え切れなかったことは明白だった。

内心で勝利を確信するわたしを、彼は慎重に担ぎ上げると、そのまま最寄りのゴミ捨て場にそっと安置した。

達成感に満ち溢れた表情で立ち去ろうとする少年に、このツンデレめ、わたしは強硬手段に出ることにした。

「単刀直入に言う、わたしを養え」

「日本語がお上手ですね」

少年はにっこりと賛辞を送ると、それじゃあと爽やかに手を振って、きびすを返した。

素直になれないのだろう、まったく世話が焼ける。ときとして譲歩することも大切だ。わたしは妥協して、仕方なく彼を尾行することにした。ヤサを突き止めてしまえば、こっちのものである。

今日の晩ごはんは何だろう。猛然とダツシユし始めた少年を鼻歌まじりに追跡しながら、わたしは本日の夕餉に胸をときめかせるのだ  
った。

## マルマル、少年の忠誠を得る

変質者に付きまといられるというハプニングに見舞われたものの、華麗にスルーして事なきを得た少年。

両親に帰宅の旨を告げ、二階にある自分の部屋に上がると、金髪碧眼の少女が窓から侵入してくる現場と遭遇した。

つい先ほど振り払った変質者である。

とりあえず警察に連絡して市民の義務を果たそうとすると、唐突に少女の拳動が不審になる。

女子に甘いとよく言われるのだが、妙なところで自覚してしまった。さて、どうしたものか。

「けけけっ、警察に電話するのっ？」

警察は苦手だ。通学路で潜伏先の品定めをしている間、何度か職務質問を受けているのだ。

そのたびに機転と力業で切り抜けてきたのだが、「おうちはどこ？」だの「学校は？」だの人のトラウマを平気でえぐってくる、あまり気分の良いものではない。

おびえるわたしをじっと見詰めたあと、少年はため息をついて携帯電話をしまった。

(だから甘いと言っただよ……)

内心でほくそ笑むわたしに気付く様子もなく、少年はわたしに座布団をすすめてくる。まあ座れ、ということだろう。

思えば、母星を追放されて以来、人の善意に触れたのははじめてかもしれない。茶のひとつも出ないことに絶望した。

少年が言う。

「で、おれに何か用でもあるの？」

「わたしを養え」

少年の口元が引きつった。直載な物言いに戸惑っているのだろうが、こちらとしても曲げるつもりはない。

どのように言い繕ったところで、結論はひとつだからだ。

少年は、辛抱強く対話を試みる。

「……なんでおれなの？きみ、言ってることが滅茶苦茶だぜ」

ふ、と遣る瀨ない吐息を漏らす少年は、そこはかとなくエロスであった。

これが「わびさび」というものか……日本文化への理解を深めるわたし。

「エロいな、おまえ」

「帰って下さい。お願いします」

ストレートに称賛すると、すかさず彼はわたしに強制退去を命じた。日本男児に土下座までされては、さしものわたしもやぶさかではない。

なんとなく彼の頭を裸足で踏みつけ、ぐりぐりする。

「だが駄目だな。おまえは黙ってわたしの衣食住を保証すればいい」

「なんなのこの子、もお」

少年はわたしの足を払い除けると、両手で顔を覆って嘆いた。

彼の母親と思しき人物が部屋に入ってきたのは、まさにそのときだ。

「みっちゃん、お友達？ 入るわね」

みっちゃんの何かを諦めたような表情が印象的だった。

## マルマル、名乗りをあげる

異国風の見知らぬ少女に平伏し、懺悔する実の息子という光景を目撃した母の心象に關して、少年はあまり詳しくないが、笑顔のまま固まり無言でドアを閉める母親という構図に幻想を抱くほど幼くはないつもりだ。

階下に消える母をすぐさま追ってあらぬ誤解をしないよう言い含めるも、「あのお嬢さんはどちらさまなの？」との問いに気の利いた答えを返せる甲斐性もなく、「あとで説明する」と言つにとどまる。疲れきつた表情で部屋に戻った少年が目にしたのは、ベッドに寝そべり漫画を読んでくつろぐ金髪であった。

もはや怒る気力もない。

部屋に戻ってきたみつちゃんは、ふらふらと窓際に身を寄せるなり、夕日が沈む荘厳な光景に感銘を受けたようで、自然の美しさ、雄大さを懇々と説きはじめた。

そして、野宿の素晴らしさを懇切丁寧に語った。

わたしは鷹揚に頷き、お風呂に入りたい旨を伝えた。

みつちゃんは、何かしら悟りを開いたようだった。

「その、みつちゃんていうのはやめてよ」

そうやって彼は、心底嫌そうに自分の名前を告げる。とくに目新しい情報ではなかったが、名乗られたからには名乗り返すのが礼儀である。

わたしは、やおらベッドの上に立ち上がり、堂々と宣名した。

「わたしは、マルマール＝マルマル。ペンタ星系第三惑星モモルの第二位王位継承者だ！」

星間連合国の加盟国に連なる者が、地球人類とコンタクトした歴史的な瞬間である！

「そうですか」

お風呂わかしてきます、とみっちゃんは部屋を出て行った。

## マルマル、少年の生殺与奪を握る

状況は厳しい。そう認めざるを得なかった。

窓から入ってきた時点である程度は覚悟していたが……なるほど強敵だ。

湯船に注がれるぬるま湯を眺めながら、少年は苦悶していた。最近の世の中は便利なもので、スイッチひとつで風呂がわかせる。

タイムリミットは夕飯までの二時間弱といったところか。それまでにあの電波少女に正しい人の道を説き、更正させるのは、エベレスト登頂とどちらが難しいだろうかと考える。

一人では無理だ。少年は結論を下す。しかし二人なら、肩を支えて歩くこともできる。

ふと思いついた彼は、頼れる友人にメールを打つ。

『実は僕、宇宙人なんです』

彼なら、きっと現状を打破する妙案を授けてくれるに違いない。少年が友人に寄せる信頼は厚い。

返事はきっかり五秒後だった。

『そうなんだ』

これはひどい。少年はうめいた。こちらの話を端から信じていない

ばかりか、議論する価値もないという態度が見え透っている。およそ現代を生きる文明人の返答とは思えなかった。

少年は落胆したが、事の詳細をつまびらかにする訳にも行かず、貴重な時間を割いてくれた友人に感謝の意を述べた。

『貴様のリアクション能力には失望した』

送信を終えた少年は、携帯の電源を切り、次善策を模索する。つまるところ、人間とは孤独な生き物なのだろう。自らの力量で何とかするしかない。

再び部屋に戻ってきたみつちゃんは、遅まきながらも自らの幸運に気付いたようで、あれこれと詮索してくる。

「母星には帰れないの？」

彼の興味は、もっぱら未知の航行法に注がれているようだった。男のロマンというやつなのだろう。

しかし残念ながら、科学の力で真空の海を泳ぎきることは力学上現実的ではないとされている。

それを可能とするのは、星間連合加盟国でも一握りの精神優位種族のみ。つまりは、わたしだ。

わたしは、いかに自分たちが崇高たる存在であり、また星々の発展に尽力してきたかを、猿にも分かるようダイジェスト方式で語った。

「つまり、帰ろうと思えば帰れるんだね？」

みっちゃんの要約は力点が著しく外れていたが、しょせん肉体に重きを置く下等生物であるから、致し方ない。わたしは寛容なのだ。

まあ、政治的な事情を省けば不可能ではない。わたしが控えめに肯定すると、みっちゃんは我が意を得たりと頷き、

「今頃、きみのお父さんとお母さんは心配してるんじゃないかな？」

「やつらとは親子の縁を切った」

正確には切られた。

「もう好きにして下さい」

わたしの境遇に同情したのか、過酷な現実に打ちのめされて頂垂れるみっちゃんは、やはりお人好しだ。言質はとった。

## 少年の未来、約束される

腹を括らねばならない。

ドッキリの看板を掲げた友人が部屋の外で待機しているという期待は今後も捨てきれそうにないが、もしも少女が自分で言うように行くあてがないというなら、仮にも女性である彼女をこの寒空の下、放り出す訳にはいかない。

学習机に備え付けてある椅子に腰掛けた少年は、瞑目し覚悟を決める。

マルマル＝マルマル。ペンタ星系第三惑星モモルの第二位王位継承者。それでいいんだな、と念を押す少年に、マルマルはアクセントが違うと文句を付けた。もっとエレガントに。

少年の決意が揺らぐ。よそさまのベッドの上で仰向けになって漫画を読んでいる、この金髪のために、自分はひとつの平凡な家庭を、されど幸せだった日々を崩壊へといざなうかもしれないのだ。その家庭とは、すなわち愛する我が家であり、文字通り他人事ではない。

両親には包み隠さず話すしかあるまい。余計な心配を掛けるのは避けたいが、それは家族に対して不義理を働いていいという理由にはならない。つまり、人生という道に迷った自称宇宙人のお姫さまを拾いました、今日から一緒に暮らしますけど問題ありませんよね。

自分が親の立場なら、とりあえず腕のいい医者を紹介するだろう。少女は警察に保護され、校門前で報道陣にインタビューを求められた友人は、全国ネットで、さも痛ましい表情で告げるのだ。「彼女

募集中です」

「おれは無実だ……」

いつしか頭を抱え、身の潔白を訴えはじめた少年をよそに、マルマルは裸足でぺたぺたとお風呂へ向かう。

人間の身体とは不便なものである。

脱衣所の洗面台に掛かっている鏡を眺めて、わたしはため息をついた。

精神優位の特異二種に属するペンタモールは、観察者がいる環境において擬態を完全にはコントロールできない。

精神を捕食する天敵から身を守るために培った、防衛本能の一種だからだ。その天敵を全宇宙からチリひとつ残さず駆逐して久しい。今、勢い余って全宇宙を征服したい今日この頃。父上、母上、いかがお過ごしでしょうか。マルマルは復讐の牙を研ぐ毎日です。

……。

何を考えていたか忘れた。

一人になると、思考能力がほんの少し、ほんの少しだかね！劣化する。ペンタモールの悲しいさがだ。

何だったか……思い出せ、がんばれわたし。

ふと気付けば、鏡の前に全裸で立っている。

(そう、美しさは罪だ)

鏡に映る裸身は、ゆんゆん、いかん言語機能が麻痺してきた。みっちゃんよ、どこへ行った。観察者がいないと、わたしはパイナップルが食べたくなってくる。いや、べつに食べたくない。そもそもパイナップルとは何だ。「pineapple」と書きます。

みっちゃんめ、ここで英単語帳を開いたな。

観察者の情報を捕捉し、記憶の再構成を図る。我ながら天才的な手腕である。

そうだ、お風呂に入ろう。人間は肉体に依る生き物なので、定期的  
に身だしなみを整えねばならない。郷に入りては郷に従えというやつか。

浴室はさして広くないが、まあ許容範囲だ。最低基準は満たしている  
と言えよう。

湯船につきり、詩吟をたしなむ。明日は古典の小テストだ。これは  
みっちゃんの残留思念か。明日というのは今日だな。割と単純な思考  
をしているので、捕捉しやすい。これは彼の美点であり、誇るべき  
特技だ。そして何より、わたしの人選が素晴らしい。

「ふう、極楽じくらく」

たっぷり一時間ほど入浴し、お風呂上りにフルーツ牛乳を所望する。

しかし冷蔵庫に蓄えがなかったため、涙をのんでエビフライをつまみ食い。舌鼓を打ちつつ、みっちゃん母と軽く談笑、優雅なひとときを過ごす。

「星人という呼び名は、あまり好ましくない。わたしたちの言葉で、ペンタモールというのが正しい名称にあたる。ひとつ賢くなったな！ 地球人類にとっては大きな飛躍だ」

力説するわたしに、みっちゃん母は「息子をよろしくお願いします」と頭を下げた。もちろん、わたしは胸を張って請け負った。わたしについてくれれば間違いはない。ばら色の未来が約束されたようなものである。

## 少年、母に立ち向かう

時間だ。

苦悩することにも疲れ果てた少年は、ゆっくりと顔を上げた。

彼の家では、定刻になると家族で集まり、食事をはじめるといふ暗黙の了解がある。

食器の配膳は、少年の担当だ。そうしなければならぬという決まりはないが、父と男二人ぼんやりと眺めて待つのが嫌で、気付いたら自然とそうした運びになっていた。時間と都合さえ許せば、家事を手伝うこともそう珍しいことではない。

少年の表情は暗い。

どうしても悪い方向に考えが転ぶ。少なくとも階下で自分を待ち受けているものが、美しい未来であるとはとうてい思えなかった。

悲壮たる眼差しで、壁に立て掛けてある木刀を見やる。修学旅行先の土産物屋で買い求めた防犯グッズであるが、ついぞ手に取ることはなかった。

連想が不法侵入者におよび、このときはじめて家出少女（暫定）の食事に関して何も手を打っていないことに気が付く。まさか、宇宙人さん地球の食べ物に合いませんよね、という訳には行くまい。母は聡明な人だから、おそらく取り越し苦労に終わるだろうが、それでも一言断る程度のことはおくべきだった。

不備を詫びておくべきだろうと振り返ってみれば、ベッドの枕元に打ち捨てられた漫画本が目優しい。やつがない。

全ては夢の中の出来事だったと割り切れれば、どんなに素敵なことだろう。

ふらりと席を立ち、ためしに布団をめくってみる。ここで、すっかり寝入ってしまった少女を発見したなら、寝顔は可愛いんだけどな、などと世迷い事を呟く新しい自分を発見できたのだろうか。それはないと断言できる。

確かに言えることは、どうやら自分の与り知らぬ間に事態は進行しているということであった。

「母さん、僕のエビフライを知りませんか」

食事時になってふらふらと姿を現したみっちゃんは、促されるままに席に着き、ひとしきりわたしの箸さばきを観察したあと、おかずの不在について言及した。

少年の母は上機嫌である。

「海に泳ぎに行っちゃいました」

「もしかして、あなたの夫も同行してませんでしたか」

「あなたのパパは、亀に連れられて竜宮城に」

みっちゃん父は、町内会で帰りが遅くなるらしい。

わたしは、味噌汁をすすりながら母と子の遣り取りを黙って見守る。父親の帰宅が遅れると聞いて、みっちゃんは悩ましげに箸を置いた。

「父さんには、おれから話すよ」

いつの時代も、少年は父を乗り越えていくものだ。みっちゃんの声には、確固たる響きがあった。事情も知らない他人のわたしが口出しすべき問題ではないのだろう。

「まだ早いんじゃないかしら」

時期尚早である、とみっちゃん母。急がば回れという言葉もある。父は偉大だ、どうするみっちゃん。

「早ければ早い方がいいと思う」

母は賛同してくれるかと思っていたらしい、少年は意外そうである。なにぶん、半生を共に過ごした妻としての言葉だ。無視できるものではない。目に見えて勢いが衰えた、その間隙を母親は突く。

「時期を見て、わたしから話します。いいですね？」

「……いつまでも隠し通せるとは思えない。隠そうとも、思わないみっちゃん、戦闘モードに移行。事前の聞き込み調査によれば、今どき珍しい孝行息子ともっぱらの評判だが、ここで驚異の粘りを見せる。」

「あら、言つわね」

聞き分けのない息子に、みっちゃん母が苛立ちを露にする。口調こそ穏やかだが、その目はまったくと言っていいほど笑っていない。そして、とうとう箸を置いた！

「みっちゃん？」

もはやどちらが正しいという話ではない、母と子の力関係を問う完全なる詰み手だ。

みっちゃんは？ これに対し、みっちゃんはどう応じる？ 彼の拳動に注目が集まる。

「マルマルさん、僕のベッドを使って頂いて結構ですので」

おまえには失望した。

## マルマル、少年の問題を解決する

学校から帰ると、知らない女の子が家にいる。ええ!？ 今日からこの子と一緒に暮らすだつて!？ しかも彼女の正体はお姫さまで……これからどうなつちゃうの!？

……と、大筋を語ればそんなところだろうか。

友人なら泣いて喜ぶシチュエーションだろうに、ちつとも心が浮き立たないのはどうしたことだろうか。

食事を終え、早々に部屋へ引き上げた少年は、手付かずで通学鞆に放り込まれたままの学校の課題を思い、ため息をついた。

少女の同居について、母の承諾は得た。次は、先方のご両親に話を通さねばならない。

未成年者を保護者の許可なしに預かることはできない。

プランはこうだ。はじめまして、どこの馬の骨とも知れない若造です。将来の具体的なビジョンはとくにありませんが、おたくの大事な娘さんは預かりました。と、まあ、そんなところか。

場合によっては、深夜に少女の実家を訪ねて、まず一発殴られてから土下座せねばならないだろう。

少女の容姿から考えるに、彼女の両親は欧米人である可能性が高い。肉食文化が育んだ屈強な肉体から繰り出される一撃を真正面から受けて、果たして自分は意識を繋ぎ止めていられるだろうか。それだけが気掛かりだ。

少年がうなつていると、夕食を堪能してすっかりご満悦のマルマルが、満面の笑顔で部屋に戻ってきた。

母の寝間着まで借りて、もう寝る準備は万端といったところだ。

似合うか、などと訊いてくる。

少年は無視した。

貴重な睡眠時間を削ってしまうことを申し訳なく思いつつ、彼女の実家の連絡先を尋ねる。

何故？ と問うてくる少女に、彼は「確認したいことが二、三ある」と言葉を濁した。家出を公言して憚らない少女に、日本の刑法を説明する気にはなれなかった。

わたしの実家と言えば、ペンタモル最大の城塞都市を一望できる天守閣のことだ。

そこに至る連絡手段など、人間を辞めるとしか言いようがない。

精神優位種族のペンタモールにとって、時間や空間などあってなきが如しである。他星で用いるような通信機器、そう例えば携帯電話だ、ああしたものは一切必要がない。

その旨を伝えると、みっちゃんはひとつ頷き、

「わかった。住所だけでいい」

「何をわかったんだ、おまえは」

わけのわからない男である。

とにかく、これ以上つきあっていられない。睡眠不足はお肌の大敵だし、何より漫画の続きが気になる。

わたしは、おもむろにみっちゃんの肩に手を掛けると、彼の目を至近から覗き込んだ。

「何をする」

わずかに動揺した声で抗議する少年に答えず、黒い双眸を凝視する。

「何も心配はいらない。今日は眠れ」

かつての天敵のように記憶を改ざんするまではいかないが、無防備な現地住民に暗示を掛ける程度はたやすい。

息が掛かる距離で囁くわたしに、みっちゃんはうるんな瞳でのろのろと頷いた。

「じゃあ居間のソファで寝るわ」

何故ため口なのか。

## 少年、黒いものを白いと言う

心配事が何もなくなくなって、少年の心は今にも飛び立たんとばかりに軽くなる。

学生服を脱ぎ、ハンガーに掛けると、ときばきと着替えを用意して、うきうきした足取りで風呂へ向かう。その様子を、マルマルは哀れなものを見る目で眺めていた。

現在の少年は、催眠状態にある。心配無用と暗示を受けて、ああまで人格が変わるのは、つまりそれほどまでに日々を憂えて暮らしているということの裏返しだ。哀れな少年である。

存分に羽を伸ばすがいい。マルマルは、一時の幸福に身を委ねた少年に心の中でエールを送ると、少年のベッドに潜り込み、さっそく漫画の続きを読みはじめた。

しかし五分ほどで、それもままならなくなる。

ペンタ星系の惑星モモルに誕生した知的生命体、ペンタモールは、「擬態」という手法で有機生物の内面に自らを投影し、姿形を得る種族だ。天敵を打ち倒すために獲得した強大な能力だったが、それゆえ代償も大きい。

ふらりとベッドから身を起こしたマルマルの瞳には、怪しい光が宿っている。金色の髪がざわざわと波打ち、彼女を構成する輪郭が幽かにぶれはじめた。

少女は無言のまま宙を浮き、室内を睥睨する。最初に目に付いたの

は、少年がこの春に両親から買ってもらったパソコンだった。

思い入れのある品だったが、少女が手をかざしただけで、それは内側からひしゃげるように潰れ、今や奇妙なオブジェと化した。

しかしそれらの「可能性」は、カラスの行水を終えた少年が部屋に戻ってくることで破棄された。

破壊活動を行ったという現実を、マルマルが選ばなかったからだ。意思を持つ確率と、ペンタモールはそう評されることもある。

「はい」

と、みつちゃん差し出したのは、柔らかそうな枕だった。

「客間用のやつ。おれ、枕が変わると寝付けないんだ。修学旅行のときに痛感した」

そう言っつて、交換した愛用の枕を片腕に抱く。寝間着代わりらしく、ジャージ姿だ。ゆったりとした服から覗く健康的な鎖骨が妙に色っぽい。

普段は折り目正しい少年が、ふとしたときに垣間見せる無防備な姿に色気を感じるのだろうか、とわたしは冷静に考察した。

「だめだ、おまえはわたしと一緒に寝ろ」

ひとりになると理性が働かない。わたしは、彼に当然の要求をした。

おそらく彼は頷かないだろうが、わたしとていちいち可能性の取捨選択などやっていたられない。面倒だ。

しかし、みっちゃんは意外にも理解を示した。

「一人は不安なのか？」

その声に気遣うような暖かみがある。それが彼本来の気質なのかどうかは判断が付かない。だが、利用できるものは利用すべきだ。わたしは頷いた。

「そうか」

みっちゃんは眉根を寄せて、しばし黙考する。

「わかった。客間用の布団持ってくる」

「ベッドと一緒に寝れば良いではないか」

ただでさえ狭い部屋だ。わたしの提案を、しかし彼はあっさりと否定した。

「この世でもっともあてにならないものは、自分の理性だ」

やはり、美しさとは罪であるらしい。わたしは大いに納得した。もっとも、彼にわたしをどうこうできるとは思えないが。

まあ、べつにそうしたいなら構わない。耳目の届く範囲にさえいれば、わたしに文句はなかった。

## 少年の父、妻に物申す

美しい妻と、礼節を知る息子。これ以上の幸福など願ひようもない。たとえ息子がその友人（むろん同性）から半ば本気で求婚されようとも、耐えてきた。古い人間であることは自覚しているが、誇り高く生きてきたつもりだ。

そう遠くない将来、定年退職を迎えたあとは土いじりでもしながら余生を過ごそう。長年、傍らで支えてくれた妻には樂をさせてやりたいと……。

その輝ける未来に、冷蔵庫を漁る金髪のお嬢さんが登場する余地はなかった筈なのだが。

どこで間違えたのだろうかとうと自問するうちにも、少女の身を呈した潜入調査は続いている。

息子がこよなく愛しているプリンを見付けた少女は、ひとしきり奇妙な踊りを披露してから、フローリングの床にだらしなく座り、慎重にパッケージをはがす。それから、いよいよスプーンを用いての实地検分に移る。ようは食った。

随分と美味しそうに食べるので、止める気にはならなかった。彼女の幸せを奪う権利が自分にあるとは、たとえそれが真実あったとしてもだ、確信しきれなかったからである。

座敷わらし、というやつだろうかと不意に思う。そうでも考えなければ、目の前で展開される光景は説明ができそう

にない。

だが、台所から顔を出した妻はあっさりと云ってのけたのである。

「マルマルちゃんです」

奥方の説明を受けて、みっちゃん父は「そうか」とだけ呟いた。寡黙な男性である。

彼はしばし黙考したのち、

「だが、彼女のご両親には一言告げておくべきだろう」

息子と同じ結論に至る夫を、奥方が穏やかに諭す。

「あなた、マルマルちゃんが可哀想だとは思わないんですか？」

親元を離れて、たったひとりで暮らすわたしに、彼女は強く共感しているようだった。

「それなのにあなたたちときたら、体面ばかり気にして。少しは彼女の身になってご覧なさい」

「しかし、それとこれとは……」

「とにかく。マルマルちゃんのごことは、わたしに一任してもらいます。構いませんか？」

ぴしゃりと言う奥方に、みっちゃん父が猛然と反発する。

「駄目に決まっているだろう。これはおまえだけの問題じゃない、家族の問題だ」

「そして、おれのプリンがない」

失踪したプリンの行方を追う少年探偵が、父の側につく。

わたしは無実を主張した。

「プリンという存在そのものを今はじめて知った」

「語るに落ちたな。カラメルが口の端についてるぜ」

「なにっ？」

慌てて口の周りをぬぐうわたしに、みっちゃんがにやりと笑った。

「嘘だ。だが、状況証拠は十分のようだな」

「くっ………!」

小賢しい真似を。

白熱する心理戦をよそに、夫婦の話し合いは佳境にもつれ込む。

「あなた？」

伝家の宝刀を抜く妻に、その夫は一步も退こうとしない。

決然とし揺るがない父の背に、息子が期待の眼差しを寄せる。

「マルマルさん、昨日はよく眠れたかな？」

「父さん、あなたにはがっかりだよ」

## マルマル、少年の願いを受諾する

どうやら自分は、自ら思うほど女子に免疫がある人間ではないらしい。

詰襟の制服に袖を通しながら、己を見詰め直す少年であった。

昨夜、少女の急接近を不覚にも許してしまった以後の記憶が、少し曖昧になっている。

覚えていない訳ではなかったが、どこか熱に浮かされたような高揚感があった。

だからだろうか。朝方、ベッドを占領する金髪という現実を再確認した際も、まったく動悸が乱れなかったと言えば嘘になる。

いくら同情する余地があったとはいえ、同年代の異性と同じ部屋で寝起きするなど、普段の自分ならありえない。

つまり、それだけ心が乱されていたということだ。

その直後に少女が目を覚ましたので、つい狸寝入りしてしまったのは、迂闊としか言いようがない。初動の遅れが、プリン犠牲を招いてしまった。無念だ。

いや、べつに中学三年にもなってプリンひとつで騒ぎ立てるのもどうかと思うのだが。好きなものはどうしようもない。

登校の支度を終え、居間に降りる。

カルガモのひなみたいにあとをついてきた少女が、素早く回り込んで「じゃん！」と新聞紙に挟まっていた広告を広げて見せてくる。

高級ブランドバッグに強く興味があるらしい。

少年は、腕時計を一瞥してから、鞆を担ぎ直して玄関へ向かう。

まだ時間的には余裕があるものの、十分ほど出発を遅らせたところで何を得るでもない。

はたと思いつき、振り返る。

「苦しゅうない」

「その件については、あとでじっくりと話し合おうな。そうじゃなくって」

説教は後回しだ。

少年は人差し指を立てて、彼女に要求する。

「絶対についてくるなよ」

ひとつ屋根の下で暮らす少女が、ひょんなことから学校についてきて、級友たちに「あれは誰」だの「どういう関係」だの問い詰められる、そんな展開など御免被る。

漫画などでは「お約束」なのだろうが、自分は違う。華麗にしのぎきってみせますと。

すると少女は、小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、

「学校だろう？ 誰が好きこのんで行くものか」

何か嫌な思い出でもあるのだろうか。ちらりと思っただが、変に追求してやぶ蛇を突つくほど愚かではない。

「それならいいんだ」

少年は安堵し、両親に出立の旨を告げる。

自分たちの遣り取りを見ていた父の、妙に生暖かい視線が気になったものの、母の声に後押しされて家を出る。

ぺたぺたと裸足で玄関まで見送ってくれた少女に、「絶対だぞ」と念押しして、自宅をあとにするのだった。

わたしは、かぶりを振って深々とため息をついた。

「ああまで前フリされてはな……」

芸人魂がうずくというものである。みっちゃんも罪作りなことをする。

仕方ない。

追われる身としてはリスクを避けたかったが、仮にも契約者の言うことである。

期待には応えねばなるまい。

わたしは、庭に面したガラス戸の前に立ち、険しい表情で青空を仰いだ。

「何事もなければいいが……」

## マルマル、誇り高き王女

もちろん、あの程度で釘を刺せたとは思わない。

五分ほど歩いたところで、少年は携帯電話を取り出した。

素早く自宅のナンバーを打ち込み、通話ボタンをプッシュする。

短い期間ではあるが、あの少女の言動を間近で観察してきて、ある程度の人となりは理解したつもりだ。

まず傲岸不遜で、自負心が高い。

変なところでプライドがないように見えるのは、常識に疎いからだろう。

世間知らずという評価が当てはまるかもしれない。

母に取り入るなど、したたかな一面も持ち合わせているようだが、思慮は浅い。

そして、かなりの楽道家である。

やつなら、今頃は何かしらのアクションを起こしている筈だ。

この電話は牽制に過ぎない。やつを電話口に立たせることで（あるいはすでに行動中か？それならば食い止めるまで）、機先を制する。

『わたしだ』

「自由奔放すぎるだろ、きみ」

家に掛かってきた電話を取る時点でどうかしている。

「ん、みつちゃんか？」

「まず姓名を名乗れ」

『その言葉、そっくりそのままお返しする』

自称宇宙人の分際で、やけに口が達者である。

「……言い忘れてた。あまり母さんに無茶を言わないでくれよ？」

『お土産は駅前のたい焼きでいい』

つけが回ってきた。まさしく電光石火だ。

『クリームあんだ。それ以外は認めん』

クリームあんを所望する少女に寝床を提供している少年は、自制心を総動員して、かろうじて頷いた。

「わかった。駅前のたい焼きだな」

『クリームあんだ。忘れるな』

更なる忍耐を求められる少年。

彼は、幸せそうにたい焼きを頬張る少女を想像することで、この試練を乗り切ろうとする。

今後の友好関係のためにも、彼女のわがママを笑って許せる術を早急に体得する必要があったからだ。

そして、それは一定の成功を収めた。

「おれ、つぶあん派」

自分のぶんも買うことにした。

『よかろう。みっちゃんよ、真のたい焼きについて存分に論じ合おうではないか』

「あ、長くなるなら結構です。それじゃ」

強引に話を打ち切って、通話を終える。

当初の目的が達成できたかどうかは微妙だが、とくに不審な点はなかった。

だが、油断するのはまだ早いだろう。定期的に確認した方がいい。

携帯電話を握り締め、少年は決意を新たにすのだった。

(これで牽制のつもりか？ だとすれば、見くびられたものだな)

受話器を置き、ほくそ笑む。

単独行動中、確かにわたしの思考活動は著しく制限される。

まして擬態は、敵の特性を模倣する能力だ。

人間に身をやつした今、わたしは「人間の身体で可能な程度の未来」しか選択できない状態にある。

ザ・島流し。

おのれ姉上。

……それはいい。

とにかく、定期的に所在を確認して単独行動を防ぐという、その発想は悪くない。

なるほど、ただのペンタモールなら行動不能に陥っただらう。

だが、わたしは王族だ。

全宇宙最強にして最悪の特異一型種族、天敵ペンタモール（前代表ココ大事）の凶王マルマーを討ち果たした英雄王マルマールの末裔である。

あまたの銀河を凶王の魔の手から救った、気高き精神を継ぐ者……！

気合いと根性で何とかするしかない。

## マルマル、智謀を尽くす

大抵いつも教室に着くと、人は疎らで閑散としてることが多い。

(今日は一番乗りかもしれないな)

そう思いつつも、一応「おはよう」と挨拶をしながら教室に入る。

「おはよう」

どうやら無駄にはならなかったようである。

少年が通っている中学校では生徒に対して、廊下では走らないことと欠かさず挨拶することを強く推奨している。小学生じゃあるまいし、と常日頃から思っていたのだが、そう馬鹿にしたものではないらしい。

母校への認識を改めながら、少年はクラスメイトに挨拶を返した。

「おはよう、瀬波さん。早いね。いつもこの時間に？」

教室に、他に人影は見当たらない。惜しくも二等賞のようだ。

机に鞆を置きながら尋ねる少年に、クラスメイトの少女は「まあだいたい」と答えた。

言葉が足りないと思ったのか、付け加えて言う。

「黒板、汚れてると気になるから」

せつせと黒板を磨いている几帳面な少女に、少年はいたく感心した。さすがは副委員長だ。ちなみに、彼女が補佐を務める学級委員長の姿は見えない。色々な意味で残念だ。

内心で級長の格付けをひとつばかり落として、使っていない方の黒板消しをクリーナーに掛ける。

ごく当たり前のように手伝いははじめた同級生に、瀬波叶かほつは切なげな眼差しを向ける。

「みっちは、本当にいい性格してるよね」

「待つて？ それはどういう意味で？」

べつに感謝されたくてしている訳ではないが、だからといって不当な評価を受けるいわれはない筈だ。

少年のささやかな反論を、叶は鮮やかにスルーした。

「わたしのクラスは、ときどき他のクラスの子たちからホストクラブみたいと言われます。いったい何が原因なのでしょうか……」

「よし、チヨークの長さオッケー」

チヨークの点検を済ませた少年は、自分の席に戻って鞆の中身を机へと移す作業に従事する。

含み笑いを漏らしつつ、叶もそれに習う。

彼女の席は、少年の斜め前だ。

着席した拍子にさらりと揺れた髪が、生来の黒色を保っていることに、少年は安らぎにも似た感覚を覚えた。

鞆の中で振動しはじめた携帯電話は、それに対する抗議なのだろうか。そうでなければいいのに、と少年は強く願った。

「もしもし？」

『みつちゃん、蛇使い座はノーカウントでいいと思わんか？』

「人違いです」

間違い電話だったらしい。即座に通話を切った少年に、叶が身をよじって言う。

「みつちー、ケータイは校内持ち込み禁止だよ？」

「見逃してくれ。授業中は電源を切るよ」

条件付きの黙認を願い出る少年に、叶は意外な、という顔をする。

彼は校則にうるさいという訳ではないが、自ら決まり事を破ることは滅多にしない。

しかし実は叶が知らないだけで、少年の携帯電話持ち込みは学校側の許しを得ている。

放課後、帰宅途中に家の買い物でスーパーに立ち寄ることが多い少

年は、自ら料理の腕を振るつこともあり、母親に確認を取らなければならぬことがしばしばある。

ただし、校内での使用は厳禁、管理は自己責任だ。

まあ実際のところ、無許可で携帯電話を持つてくる生徒など山ほどいるのだが。

わざわざ許可を申し出ているあたり、律儀な少年であった。

一方その頃、わたしは奥方をまじえて作戦会議中である！

居間のテーブルに市内地図を広げ、目的地を赤丸で囲う。

「目標まで徒歩二十分か」

さすがに授業中は身動きが取れまい。やろつと思えば、牽制の合間を縫って乱入することもできる。

だが、お世話になっっている奥方の手前、それは最終手段に取っっておきたい。

そこまではやらないだろうとみっちゃんを高をくくっているようだが、わたしはやる。いざとなったら、やる。目標のためなら手段もいとわない、それがわたしのチャーミングポイントだ。

万が一にもありえないことだが、仮に（仮にね）みっちゃんの知略がわたしを上回ったとしたら、そのときは互いにとって嬉しくない

結末が待ち受けていることだろう。

まあ何事にもルールは必要だ。あくまでも最後の手段である。

（決戦は昼休みだな）

授業から解放されるひとときであり、また最高のロケーションでもある。当然、みっちゃんは最大に警戒していることだろう。

「出し抜いてみせる。奥方、如何か？」

水を差し向けると、彼女は上品に微笑んだ。

「あの子、照れ屋だから」

「うむ」

早くも作戦会議は暗礁に乗り上げたようである。

ご主人は働きに出してしまったし、ここが踏ん張りどころだ。

## マルマル、人類の可能性を追求する

昨日のメールはなんだ、何を企んでいる、と詰め寄ってくる友人を軽く言葉責めしながら、HRの時間を迎える少年。遅刻すれすれに登校してくる委員長への視線も冷ややかに、朝から下らないことで興奮している友人を追い払う。

チャイムが鳴ると同時に教室に入ってきた担任教師は、若く美しい二十代半ばにして学年主任を任される才女だ。もしくは他の教員に能力的な不安があるのか。少年は、愛校心ゆえに前者だと信じたかった。

委員長の号令で一斉に起立し、挨拶する。

「おはよう」

平川静乃は、眼鏡のつるを押し上げながら、本日の連絡事項を口にする。

「最近、アンケートを装い生徒に声を掛ける不審人物が近隣に出没しています」

世の中は、暇人であふれている。しょうもない輩がいたものだ。呆れながらも少年は、担任教師の凜とした声に耳を傾ける。

「特徴は金髪の……」

ところで話は変わるが、今日の給食は何だろうか。少年は、昼食のメニューに思いを馳せる。

「くれぐれも注意するように」

そう言つて静乃は結んだ。そうして、前から三列目の席に座る男子生徒を注視する。

「とくに……」

「先生。相手が女の子だからって油断しちゃ駄目ですよね」

少年は、彼自身の名誉を守るために拳手して代言した。

静乃は頷き、同意を示した。

「そう、わかっているならいいんです」

もちろん、わかっている。少年は実直に肯く。女子に甘いなど、そんなものは根も葉もない噂に過ぎない。自分は男女平等を是とする人間だ。

教師との遣り取りがおかしかったのか、となりの席の女子に肩をつつかれて、少年は照れ笑いをする。

自覚はないのかもしれないが、男子に対しては絶対に見せない表情だった。

慈しむような目で女子生徒の笑顔を見ている少年に、静乃は冷然と告げる。

「いえ、わかってないわね。教えてあげるから、あとで職員室にい

らっしやい」

心配してくれるのはありがたいが……。少年は、担任教師の申し出を固辞した。知らない人について行くことは正しいかどうか、幼稚園の頃に正解を暗記していたからだ。

普段は厳しく、怜悧な美貌が、不審げに少年を見下ろす。彼女の短所をひとつ挙げるとしたら、それは自分の教え子を信じ切れないことだった。そして、それは正しい。

だが、残念ながら手遅れだった。

擬態は無敵の能力だ。

例えば、大抵の精神優位種がそうであるように、ペンタモールは肉体が「本質でないからこそ」完全にコントロールできる。

それは、人間が「心」の存在を説き、執念すら感じさせる執拗さで「法」を整備し「国」を発展させてきたことと似ている。

そして、肉体を完ぺきに制御できるということは、その潜在能力を余すことなく引き出せるということだ。

わたしは、一張羅のワンピースをばさつと広げて、その場で優雅にくるりと回った。

「すごいわ、マルマルちゃんー！」

奥方が、興奮を隠しきれない様子で称賛してくる。

ふふふ。パジャマ姿から一転してワンピースを身にまとったわたしは、腰まで伸びる自慢の髪を指先で払う。

これぞ、人間に秘められた潜在能力、「早着替え」である！

「おお……」

わたしは、感動に打ち震えた。

テレキネシスやサイコメトラーを筆頭に、タイムトラベラー、ラプラス、ワールドポーターなど様々な能力を見てきたが、これほどまでに実生活に即した能力は珍しい。

（人間もそう捨てたものではないな）

彼らの可能性に賭けてみるのもいいかもしれない。

新たな時代の到来を予感して、わたしは強く思うのだった。

## 少年、退路を失う

授業の合間に教室を抜け出しては、自宅のマルマルと電話越しの逢瀬を重ねる少年。

『みつちゃん、授業はいいのか？』

「まあね、きみこそ忙しくないか？（こいつ、探りを入れてきたな……）」

『今は大丈夫だ。みつちゃん、今日の夕飯は期待してくれていいぞ（……45分間隔か）』

「きみが作るのか？ 楽しみだな、やめてくれ（……どこまでだ、どこまで踏める？マルマル＝マルマル……）」

次第に（表面上）打ち解け合った二人は、探り合いにも飽きてくる。

先に切り込んだのは、少年の方だった。

「……条件を言え」

学校の中庭で、人目につかないよう柱に背を預けて告げた言葉が、すでに堅気の人間が言うことではない。

彼は、自らの劣勢を認めざるを得なかった。

彼女の内にある線引きが、いまだに読めないのだ。

授業中に乱入してくるつもりはないようだが、それもどこまで続くか怪しい。

いや、むしろそうしてくれた方がよほど対処しやすいと先ほどまでは考えていた。

授業中なら、一言弁明すれば事足りるからだ。親戚の子を預かっているとしても言えはいいだろう。少女は反論するかもしれないが、むざむざその機会を与えるほど自分は甘くない。

だが、状況は変わった。

朝のHRの一件。

彼女が補導の一步手前まで踏み込んでいるとなれば、話は違ってくる。

親元に返してやるのが一番だと自分は思っているが、母がああまで言うのなら、その点はいい。

……が、住み処を求めて住宅地を徘徊していたという目撃証言は、あまりにも致命的だ。

ましてあの外見、いかなるアリバイトリックを弄したところで、徒労に終わることは目に見えている。

……いや、はっきり言おう。

彼女の名誉を守った上で、つい先日まで路上をうろついていた少女が我が家の敷居を凶々しくもまたいでいる事象を、論理的かつ明快に説明する手段はひとつしかない。

つまり、ひと目出会ったそのときから恋に落ちました、両親は祝福してくれてます、結婚式は海が見える教会で、僕たち幸せになります。

その瞬間、自分の人生は終わる。

当然、彼女は拒絶するだろうから、見初めた少女を言葉巧みに自宅へ連れ込んだ男としてのセカンドライフが幕を開けるのだ。

と、そこまで考えて、ふと思う。休み時間のたびに電話でお話って、なんだか仲つむまじい恋人同士みたいですね父さん……。

心の中で父に報告する少年。頬が熱い。

「条件が」

悪くない展開だ。とうとう譲歩を引き出してやったぞ。みっちゃんめ、手こずらせおって。

『……………ああ』

緊迫感あふれる声で応じるみっちゃんの心境たるや、屈辱に打ち震えること必至だろう。

対照的に、わたしは笑いがとまらない。

「さて……………急に言われてもな」

勝者の余裕というやつだ。

玄関わきの廊下で足を崩し、電話親機から子機へと伸びるコードを指先でもてあそびながら、わたしは愉悦にひたる。

一時は追い詰められたものの、何の事はない、終わってみればわたしの完全勝利だ。

更に、このシチュエーション。ちょっと生意気なみっちゃんを思うままにいたぶれるというオプション付きだ。

「ふふふふ」

どうしてくれようか。

獲物を前に舌なめずり、二流三流の手口ではあるが、こればかりはやめられない。

窮鼠猫を噛むとは言うが、獅子を前にしては甚だ無力に等しい。

まず、桜並木通りの喫茶店でチョコパフェを奢ってもらうのは確定だろう。

そのあとは、郊外の水族館だ。わたしは動物が苦手というか、ほとんど敵対関係にあるので、今後の活動方針を定めるにあたって、中立派の意見を仰ぎたい。結論から言うと、イルカショーが見たい。

この星の新たな覇者（予定）として、遊園地の各種アトラクションを安全点検しておく必要もあるだろう。絶叫マシーンなど、とく

に気になる。

氷山の一角ではあるが、わたしの偉大なる野望、その壮大さに、み  
つちゃんは度肝を抜かれたようである。少し間を置き、

『おれも行くのか、それ』

当然だ。わたし一人では、何をしでかさかわからない。というより、  
契約者が同行しないでどうするのか。

契約者としての自覚（本人の承諾は得てません）を促そうとするわ  
たしに、彼が言う。

『それは、ちよつと』

おおう、噛まれた。

みつちゃん、徹底抗戦の構えである。

## マルマル、出陣

少年の様子がおかしい。

給食を食べ終え、昼休み。食後の教室でまどろむ委員長は、机に片ひじをつけて携帯電話をぼんやりと眺めるミスタージェントルを発見する。

いつもならこの時間、図書室で尋常ならざるタイトルを貸し出しカードに刻んでいる筈の彼の身に、いったい何があったのか。

不気味に思ったクラス代表者は、その使命感ゆえに、あるいは副委員長に強制されて、少年に声を掛けるのだった。

「そんなにたそがれてどうしたのみっちー」

いささか棒読みくさくなってしまったが、ありもしない熱意は伝わった筈だ。

すると少年は、待ってましたとばかりに高速レスポンスを返した。

「例えばだな委員長」

「ああ、ごめん、言いたくないならいいんだ」

人には誰しも触れられたくないことの二つや三つはある。

力及ばず引き返そうとするクラスご意見箱を、少年は無理に引き留めようとは思わなかった。彼もきつと忙しいのだろう。

「みつちー、その目はやめて。それ、人間に向けていいたいぐいの視線じゃないからね?」

しかし彼は結局、困っているクラスメイトを見捨てることができなかったようだ。不承ぶしよう、席につく。

それを見届けてから少年はひとつ頷き、繰り返す言う。

「例えばだ」

「うん、なに?見知らぬ美少女を命懸けで救ったんなら結婚すればいいよ」

現実にはありえないことを口にする委員長を、少年は無視して続ける。

「おれは、おまえらと話すぶんには二十分でも三十分でも喋り続ける自信がある」

「みつちーの全開トークに、おれは耐えきれぬ自信がないなあ……」

「マキくんを見習え。彼なら、どんなにへこたれても次の瞬間には立ち上がるぞ」

マキというのは、少年の友人である。この際、親友に格上げしてもいい。

友人と言う割には、顔を合わせれば口喧嘩ばかりしている二人の関係が、委員長にはよくわからない。

「マッキーは、どうなんだろう、みっちーのことライバル視してるっていつか、なんなの？」

「それは、おれが訊きたい」

そういえば、と少年は周囲を見渡す。いつもなら何のかんのと難癖をつけてくるやつ姿が見当たらない。

「あれ、マキは？」

親友が悩んでいるというのに、やつは何をやっているのか。彼との友情を疑う少年に、委員長が淡々と言う。

「卒アル部隊に引きずられて行った」

卒業アルバム制作委員会のことだ。来春に卒業を控え、今頃はアルバムに載せる写真の添削に入っている筈だ。

「なに、あいつそんなことやってるの？」

たしか文化祭の実行委員もやってなかったか？  
つくづくイベント事が好きな男である。

「いや、推薦したのみっちーでしょ」

「え？」

そうだったろうか。どうしても良すぎて記憶にない。

「そうだよ。タイムセールに間に合わないとかで、もういいからおまえやれよ的な」

見くびらないで欲しい。そんな理由で友人を売るものか。きつと卵が安かったのだらう。それなら納得も行く。

少年は頷き、もっともらしい理由をでっちあげることにした。

「ああ、うん。せつかくみんなで何かするなら、思い出に残ることがいいと思つてさ。あいつ頭いいし、企画力つていうの？ そついうのおれにないから。うらやましいんだよね」

「それ、推薦したときも言つてた。マツキーも、そこまで言つたら仕方ないなつて」

まったく記憶にないが、二秒でひねり出した推薦動機が過去と一致したというなら、それはきつと真実なのだらう、と少年は思った。

しかし委員長の考えは異なるようだった。

「その次の日、おまえがついてこなかったせいで卵が1パックしか買えなかつたつて怒つてた」

ああ、その記憶はある。

先着順で、おひとり限定の大特価だった。

やつは、いつも肝心なときにいないから困る。

しかし、その話を総合すると……

「委員長は記憶力がいいな」

日々を生きるので精一杯な自分にはない武器だ。

少年の家には、昨日から同居をはじめた少女がいる。

放っておくと色々とまずいことになりそうな少女である。

（焦っても仕方ない。わかってはいるんだけど）

いったん意識してしまうと、彼女と何を話していいのかわからなくなってしまうた。

事の重要性は理解しているつもりなのだが……。

少年は、ため息をついた。

なるようになれだ。

諸事情により、現在マルマルは留守にしております。

## 月には猫が住んでいる

彼女を誤解していたのかもしれない。

放課後、駅前に寄った帰りである。部活動を休ませてもらい帰途についた僕は、同居人の評価を上方修正していた。

結局、少女が学校に姿を現すことはなかった。

まあ、考えてみれば、そもそも家出少女が人前に出ること自体、おかしいのだ。なんのメリットがあるというのか。

だが、理屈ではない。いま、僕は感謝の気持ちで一杯だった。この気持ちを明文化するなら、

(誠意を見せてもらった)

という一言に尽きる。つまり裏を返せば、彼女を欠片も信用していなかったということだ。情けない。これからしばらく共同生活を営むのだ、いくら窓から不法侵入してきたとはいえ、いや無理だ、その前提から入ると論理が破綻する。

とにかく、彼女は約束を守ってくれた。むしろ破る方がどうかしているのだ、疑って掛かってしまったことを申し訳なく思う。包みの中のたい焼き三つは、その非礼を詫びたものだ。食べ物で釣るようで悪いが、精一杯の気持ちである。

家についたら、まず彼女に謝ろう。そう心に決めると、自然と歩調が早まった。

「……………」

べつに、野良猫たちに囲まれて路上で倒れ伏している少女を見なかったことにしようとした訳ではない。

なにしろ、僕の中でバージョンアップを遂げたマルマルさんと、自宅と学校を結ぶ線上で力尽きている少女の間には、悲しいまでの隔たりがあるように感じられる。

少女の生存を確認するように、トラ縞の猫が彼女の頭を前足で小突いている。

足早に通り過ぎようとする僕を、猫の国の住人が目ざとく追いつがる。素早く立ち上がるやいなや、僕の腕をがっしりと掴んだ。肉球がついていなかったことだけは確かだ。

認めよう。僕は真実を知るのが怖かったのだ。彼女は、紛れもなく残念な同居人である。

「みつちゃあん」

涙目ですり寄ってくるマルマル。性懲りもなく小学生時代のあだ名で呼ばれて、まず謝る気が失せた。

無言で猫たちと見詰め合っている僕に、彼女はこの愛玩動物らがいかに凶悪な生命体であり、また狡猾な存在であるかを涙ながらに訴えた。

要約すると、猫と喧嘩して負けたらしい。

行儀良く座る襲撃者たち（にゃあと鳴く）は、しれっとしている。懐かれたという様子はないから、きつと暇つぶしの一環なのだろう。毛繕いをはじめた猫たちを指差して、不倶戴天の間柄を強調する少女というのは、第三者から見たらどうなんだろう。たぶん僕と同じ気持ちなのではないか。

住宅地だったのがせめてもの救いだ。道幅が狭く十字路が連続する造りになっているため、人通りが少ない。おかげで他人の振りをして立ち去らずに済んだ。

「こいつらには擬態が通用しない。わたしとともに戦ってくれ、みっちゃん」

「そうか」

都合五度目となる相づちを打って、僕はたい焼きをかじる。僕の精一杯の気持ちは、クリーム味がした。

猫たちが物欲しそうな顔をしていたので、ひとつ分けてあげる。とくべつ猫好きという訳ではないが、不思議といまは優しい気持ちになれた。

猫と同じ顔をしている少女に、僕は言う。

「さて、申し開きがあるなら聞こうか」

例えばだ。翌朝の新聞の見開きに、一面で「月には猫が住んでいる」と報じられたとする。

信じる、信じないは個人の自由だろう。そうだったのかと感心する人がいれば、一笑に付す人もいるだろう。中には、だったら自分で行って確かめてやる、という人もいるかもしれない。

そうして、ふと月を見上げれば、そこでは兔がぺったんぺったんと餅をついているわけで。

それを踏まえた上で聞いて欲しい。

僕の家には、自称宇宙人のお姫さまが住んでいる。

人間の姿をしていて、流暢な日本語を操る少女だ。実家に勘当されて、行くあてがないらしい。

いまは、僕のとまりで駅前のだい焼きを幸せそうに頬張っている。

ところで僕、受験生なんですよね。

今日も課題を忘れて、というより課題の存在そのものを忘れて散々でした。

のんきにお月見してる場合じゃありません。

「マルマルさん、宇宙の超科学とやらで何とかありませんか」

「もぐもぐ、それは人間を辞めるとしか」

## 少年、明日を信じて

近頃の父は、仕事帰りにお土産を買ってくることが多い。僕も薄々は感付いていたが、会社勤めで家族との時間を持ってないことを気にしていたようである。

ただ、そのお土産が甘菓子に偏りすぎてはいまいか。母はともかくとして、僕は甘いものがあまり好きではない（プリンは除く）。まあ脳の活動には糖分が重要というから、これは不器用なりに息子を案じた父からの、受験をがんばれというメッセージに違いない。ありがたく頂戴するでしょう。

「マルマルさん、クッキーは好きかね」

「うん」

「そうかそうか。たんとお食べ」

居候の嗜好と一致しているのは、単なる偶然だろう。

母はどうか。

僕の母親は、我が母ながら、よくできた人である。

我が家に転がり込んできたお姫さま（笑）が可愛くて仕方ないらしく、あれこれと身の回りの品を買い与えてやっているようだ。

そのことと、僕の小遣いが消失したことの関連性を問い質してみたところ、母は言った。

「わたしは、あなたの代わりをしてあげてるんです。感謝しなさい

ね

まったく意味がわからなかったので、その真意を問うてみた。

母は、まだまだ未熟な息子に呆れたようである。お手数をお掛けします。

「あなただって、マルマルちゃんが可愛い格好をしていたら嬉しいでしょう」

そんなことはない。僕は即座に否定した。

たとえ彼女がどのような出で立ちをしていたとしても、そう仮に男性だったとしてもだ、僕の態度が変わることはない。

人間が万物の霊長類とされるゆえんは、その精神性であり、僕が心を動かされるとしたら、それは内面の美しさ以外ではありえない。そうなるよう育ててくれたのは、他ならぬ両親である。

自信をもって断言する息子に、その母親は少し遠い目をしてから、何を言うでもなく静かにフェードアウトしていった。あれ、お母さん……？

つまるところ、僕が受験勉強に勤しんでいる間に、我が家は着実にやつの侵略を許しつつあったのだ。

そのことに僕が気が付いたのは、十二月の初旬にもなるうかという時期であった。

(多少は知恵が回るようだが……)

おれはそう甘くない。一筋縄で行くとは思わな……。少年がマルマールを見詰める視線には、ひと欠片の油断も見られない。

二人掛けのテーブルを挟んだ向かい側の席で、チョコパフェをついばんでいる少女を睨んでいる。

金髪に碧眼の、異国情緒あふれる少女だ。

二人はいま、桜並木通りの喫茶店にいる。

学校侵入未遂事件からこちら、すっかり引きこもりと化してしまった彼女を、社会復帰させるために連れ出したのだ。

「美味しい?」

「うん!」

「そう」

経過は順調である。念願だった甘くてほろ苦いビターチョコとの対面に目を輝かせているマルマルに、少年の頬がゆるむ。この調子なら、来年の雪が溶ける頃には無事に自分の殻を破れそうである。

あのような糖分のカタマリを食べようとは、自分なら思わないが、嗜好は人それぞれだ。

休日のランチタイムだ、豊富なデザートメニューを取り扱っている人気店ということもあり、店内は女性客でひしめき合っている。

だから、もちろん少年はクラスメイトと出食わす可能性を考慮に入れるべきだったし、当然そうした。

いざというときのためにメンテナンスしておいた、牛の着ぐるみを装着しての万全の態勢である。

門前払いされるかもしれないという危惧はあったが、受付の女性店員は引きつった笑みで店長を呼んでくれた。

そして現在、子供にローキックをされている。

小学生低学年だろうか、やんちゃな男の子である。

しかし好奇心は猫を殺すという。

静かな殺意を芽生えはじめた少年であったが、

「こら！ 牛さんが可哀想でしょ」

ホントにね。

その母親と思しき女性に頭を下げられて、「お気になさらず」と紳士的な対応をする。

母親に引きずられていくクソガキに、鶴の構えを披露することも忘れない。

席に座り直して、少年は思った。

(限界だ)

店内は暑い。まるで灼熱地獄だ。

(……いや、まだイケる。おれはこんなところで終わる男じゃない。そうだろ?)

ぐったりとしながら、自己暗示に余念がない牛さん(中学校最高学年)。

一部始終を見ていたマルマルが、言う。

「ところでみつちゃん、その格好は何のつもりだ」

「いま、それを言うのか」

友人なら第一声でツッコんでくれるだろうに。

一言でもいい、家を出発する前に「ない」と言ってくれば、このようなアトラクションに挑戦する事態は避けられた筈だ。なぜ言わない。

少年は、着ぐるみの中でうめいた。

「はあ、はあ。……ぐっ」

「……そんなにツライなら脱げば良かる」

「おれは、子供たちの夢を、この国の未来を守る……!」

受験戦争真っ只中の少年が、着ぐるみの中で吠えた。

それは、きつと感動的な光景だった。

## マルマル、覚醒のとき

マルマル社会復帰計画第一段を無事に完遂した少年。瀬波叶とその友人の秋津萌<sup>めぐみ</sup>と店内で遭遇し写められるというハプニングはあったものの、想定内の事態である、死力を振りしぼって鳳凰の舞を披露した牛さんに死角はない。

今日は、朝から志望校の学校説明会だ。

友人と待ち合わせて一緒に公立高校へ向かう。

結論から言うと、とくに見るべきものはなかった。しいて挙げるとするなら、校舎が綺麗だ。

友人の志望動機などはまさしくそれで、彼いわく勉強はどこでもできるが、汚い環境では嫌だとのことである。

その余裕とも取れる態度が気に入らなかった少年は、公衆の面前であることを配慮して「心が汚れていては意味がない」と一般論を述べるにとどめた。

疚しいところでもあるのか過剰反応する友人を軽く言葉責めしていると、それまで他人の振りをしていた叶に無表情でたしなめられた。

「第六中学の方ですよね？」

思い過ぎしならいいのだが、自分の記憶が確かなら彼女とはクラスメイトだった気がする。

叶は、続けて言う。

「二人ともココ受けるんだ。そっか」

一日と置かない再会に一瞬ときりとした少年だったが、まさかバレル筈はない、この土壇場で進路に悩んでいる様子の叶に素知らぬ顔で挨拶する。

「瀬波さんも？」

いくらクラスメイトとはいえ、普段あまり話さない女子の進路希望を知る機会というのは、意外と少ない。まったくない訳ではない。繰り返すが、皆無ではない。

余計なことを言い出そうとする友人をひと睨みで黙らせて、少年はにこやかに叶の返答を待つ。

叶の可憐な唇から吐息が漏れた。この季節、日中でも屋外は冷える。薄手のコート一枚では心許ない。

少年にマフラーを巻かれながら、彼女は胸中を吐露した。

「いま、どうしようか悩んでる」

この時期にか、と尋ねるマキ（親友）は、首元から吹き込む北風に武者震いが隠せない。

そのとき偶然通り掛かった委員長が、快く手袋を提供してくれたおかげで、叶の防寒対策はこの上ない充実を見せた。

「ちよつ、みつちーなにすんの。なんでおれ脱がされてんの。なんなのこれ、なんの集まりなの、瀬波を愛でる会？」

叶が、マキへと向ける視線は切ない。

「素敵なお友達ですね」

と、まあ、ありふれた日常を過ごして帰宅する。

説明会の日は直帰で良いと言われているため、いつもより早く家路についた。

父は、まだ会社で働いている時間帯だ。

居間では、母が編み物をしている。

僕は、周囲の人間から手先が器用すぎて気持ち悪いと言われる程度には裁縫ができる。何か手伝えることはあるか、と尋ねると、母は穏やかに微笑んで拒絶した。

「みつちゃんは、極端なところがあるから」

そうだろうか。そうかもしれない。さして勉強が得意でもなければ、運動ができる方でもない。

家庭科あたりは良い成績が取れそうなものだが、授業では手を抜いているため、平々凡々たるものだ。

クラスメイトに家庭の味を振る舞うのも悪くはないが、それだけの理由で彼らの学習の機会を奪うというのも気が引ける。

単に、からかわれるのが嫌というのもある。

これで、実は超能力者なんだけど政府に追われているので普段は隠して生活してます、というのなら格好もつくのだろうが。あいにくと超自然的なパワーとやらを發揮できた試しはない。これでも色々励んではみたのだけれど。

今日あたり何の前触れなく覚醒できないものかと思案しながら、二階の自室に上がる。

かつて僕に安らぎを与えてくれたベッドの上で惰眠を貪っている金髪は、まるで僕自身に秘められた未知のエネルギーを象徴しているかのようなだった。

この自称美少女、いや、女性の容姿に関して揶揄するような真似は慎むべきだ、反省しよう。美しくあろうとする人は、その万人が美しいのだから。

麗しの同居人は、布団の中で身体を丸めて、健やかな寝息を立てている。

お姫さま、というのは言い過ぎにしても、お嬢さま育ちではあるのかも知れない。寝相は良いし、動作ひとつ取っても洗練されている。

ちなみに現在、午後の二時。

寝顔をまじまじ眺めるのも失礼かと思い、極力静かに着替えを済ませる。

しかし眠りが浅かったのか、衣擦れの音で目を覚ましてしまったらしい。

「んあ」

第一声が、んあ。

のろのろと身を起こし、ぼつと虚空を眺めている。お目覚めですか、おはようございます。

母が買ってきた、若葉色のナイトウェアが可愛い。

そして寝間着姿を維持している時点で、ついっかかりうたた寝してしまったという好意的な解釈は無念にもこの世を去った。

齢十五にして二度寝の至福を知り尽くしている僕は、あえて声を掛けない。

「ん」

と第二声。

ほつれた金髪が華奢な肩を滑り、はらりと舞う。それは絹糸のような滑らかさで、窓から差し込む日の光を浴びてきらきらと輝いたんだらうね、きつと。

べつだん観察日記をつけている訳でもない僕は、参考書とノート、筆記用具一式たちとのきずなを深めるべく、これから居間で愛を語り合うのだ。

しばしの間、苦楽をともにするであろうドリームメンバーの選出を終えて、部屋を出ようとす。

「み、みっちゃん」

お声が掛かった。

どうやら僕はサイレントキルを生業とする暗殺者には向いていないようで、ほっとひと安心だ。

そのことに気付かせてくれた少女を振り返ってみると、彼女は人差し指を突き出した姿勢で、されど枕と布団は手離し難いらしい、指先が小刻みに震えている。

僕も心得たもので、みなまで言うなとひとつ頷き、人差し指を伸ばす。

すでにドアへ向かって歩き出していたので、彼我の隔たりは悲劇的なまでに大きい。

僕が自身の柔軟性を限界まで信じて片手を突き出すと、彼女も上半身を前のめりに振って応えようとする。

そしてやがて、幾多の障害を乗り越えて、二人の指先が軽く触れ合った。これを奇跡と言わず何と言おう。

それを見届けてから、マルマルはつぼみが開くように微笑み、そして力尽きた。

ぱたりと倒れて、再び夢の世界へと旅立つ。

無益なひとときを過ごしてしまった。

ため息もそこそこに、僕は居間に降りて受験勉強をはじめたのであった。

## マルマル、宇宙を駆ける

おれ「見付けたぜ、子猫ちゃん」

マル「わたくしにひれ伏しなさい！」

譲れないものがある。  
護るべきものがある。

背負ったものは重すぎて、過去を振り切れるほど薄情にはなれないから、未来に手を伸ばしても届かない。

未練だ。人は臆病だから、手を取り合って笑うことも出来ない。  
そんなことは、とうに分かりきっているのに。

早い話が、マルマルと対戦格闘ゲームをして遊んでいる。

幼少のみぎり、たまには子供らしい遊びをしなさいと父が買ってきた一世代前（二世代前？）のゲーム機を、マルマルが押し入れの中から（どういう経緯で？）引っ張り出してきたのである。

僕の部屋にはそもそもテレビがないため、居間のソファーに肩を並べて腰掛けて、このくそ忙しいときに来るべき恒星間戦争へと備えている。

学生の息子が仮想世界にうつつを抜かしているというのに、その両親は微笑ましく見守るばかりだ。

「あら、また負けたわ」

「今のは惜しかったな。詰めが甘い」

連敗記録を更新しているいまほど、教科書を恋しく思ったことはない。

破竹の勢いで連勝を重ねるマルマルが、となりできゃっきゃと嬉しそうにはしゃいでいる。

実は受験生でしてとは、とても言い出せない雰囲気だ。

しかしこの女、強いな。僕は感心した。二次元の世界にさして関心を持たない僕だが、この手のゲームは初見である程度の操作をこなせる。

ところが、彼女はあっさりとそれに追隨してくる。

まず反応速度が尋常ではない。弱パンチを目で追いカウンターを取るなど、ほとんど人類の限界値に達している気がする。こんなところですぶっているには惜しい人材だ。

フレアスカートから覗く膝小僧がまぶしい。コンボを応酬するたびにソファアの上でゆさゆさと身体をゆするものだから、そのつどチユニックの下に着込んだキャミソールの肩ひもがずり落ちそうになる。

それを直してやっている間に超必殺技を叩き込まれたのは、誤算だったと言つ他ない。

二度目の完全勝利を収めた少女が、ふふんと鼻で笑う。

「みっちゃんの動きは完全に見切った」

「言ってくれるぜ。だが、これで勝敗は五分と五分……」

僕は、静かに瞑目して意識を切り替えた。心のギアをひとつ落とし、集中力を浅く広く保つ。

「きみは誇ってもいい。おれをここまで追い詰めたのは、マキ以来だ」

もつとも、やつ以外とゲームで遊んだ記憶はないのだが。

称賛の言葉を贈る僕に、マルマルがちょこんと小首を傾げる。

「マキというのは、みっちゃんの友達か？」

「ん？ どうか」

当人がいないところで改めて訊かれると、答えに窮するものがある。ひよっとしたら、いまこうしている間にも友情は終わっているかもしれない。

あの男の人生は常にクライマックスなので、今頃は政府の陰謀に巻き込まれて銃弾の雨を掻い潜っていてもおかしくはない。そして彼は、黒服のエージェントにこう言われるのだ。

『そろそろ観念したらどうだ。おまえの友人は、先に逝って待つてるぞ』

なんと僕が死んだことになっている。

そこで「嘘だ！」とでも反駁してくれればいいのだが、リボルバーの残弾を冷静に数えながら「それがどうした？」と切り返しやがった場合、死地から生還した彼と今までと同じように接する自信はない。

友情に永遠はなく、しかし脆く儂いから尊いのではないか。

僕が自説を披露している間、マルマルは「ふむふむ」としきりに相づちを打った。

「学校は楽しいか？」

「ええ、まあ」

なんだこれ、父と子の会話？

本家父は、マキくんの話題になぜか敏感だ。かすかに握りしめられた拳が向かう先は、いったいどこなのか。

(やつは、可愛げがないからな)

性格の問題だろう。同情はする。が、己の身から出たさびだ、加勢はしない。

不思議そうな顔をしている少女に、父さんはマキが苦手みたいだと耳打ちする。

くすぐったそうに身をよじったマルマルが、さも知ったような口を

利く。

「うちにはいらぬ子というわけか」

うちというのは、いわゆるみっちゃんが生まれ育った我が家のことなのでしょうか。

何気なく家族の一員へと昇格を果たしている少女に、僕は戦慄を禁じえない。

## 対決、少年と叶

秋津さんがいない。

となりの席が無人のままというのは、落ち着かないものだ。

無言であるじ不在の机をじっと見詰めていると、死地から生還したかもしれない友人（暫定）が珍しく上機嫌で教室に入ってくる。

普段と何ら変わりない無表情だが、僕にはわかる。親友ですから。

「何がそんなに嬉しい」

椅子を傾けて不謹慎をなじる僕に、やつは「べつに普通」と口答えした。

それから、僕のとなりの空間を見るともなしに見て、はっとした。

なんだ、その反応は。

僕は、席を蹴って立ち上がった。腕を組み、しまったという表情で後ずさるマキを、冷然と見下す。

「……………」

さらに言葉でいたぶろうと口を開き掛ける僕に、瀬波さんが「こら」と学級日誌で頭を叩いて制止してくる。

彼女は、やれやれと右手を腰に当て、朝からお勤めご苦労さまです、存在意義が定かでない黒い台帳を教卓の上に置いた。

「マツキーに八つ当たりしないの」

「悪かったな、マキ」

「早っ」

僕の中に点在する用途不明の隠しパラメータのひとつが、瀬波さんに叱られることで、ぎりぎり通常値を取り戻したのだ。

日常生活を送る上では支障のない数値だが、大は小を兼ねるといふ。多きに勝つことはなし、だ。仕方ない。

僕は、秋津さんのことを瀬波さんに尋ねてみることにした。

いかにも優等生然とした副委員長と、お騒がせなトラブルメーカーという、一風変わった組み合わせだが、彼女たち二人は仲がいい。

「瀬波さん、」

「ごめんね、みっちーには言わないでってメグちゃんが」

「早っ」

そんな、まさか僕に心配を掛けまいと？

黙秘権を行使中の瀬波さんは、決死の眼差しで僕の挙動を観察している。

（弱ったな……）

そんな健気な瞳で見られると、僕の庇護欲がうずいてしまう。

おそらく秋津さんは風邪をひいたのだろう。先日の説明会に姿を現さなかったことと、瀬波さんの態度から、僕はおおよその事情を察した。

わざわざ女子の家までお見舞いに行くのもどうかと思うのだが、秋津さんと瀬波さんは僕という人間を誤解しているようだった。

ならば、その期待に応えたい。

そして何より、僕に隠し事が出来ると思っているなら、その勘違いを正してあげたかった。

「そうか、残念だな」

ぼそりと独りごち、席に腰掛ける。

すると瀬波さんが、すかさず食い付いてきた。

「なにが」

「いや、べつに。こっちの話だよ」

彼女の追及をいなし、そうかそうかと頷く。

隠しきれないと悟ったか、瀬波さんが切り札を出した。

瀬波さんは、頭の回転が早い。無駄な努力をする人ではない、何かあるとは思っていたが。

彼女が突き出した携帯電話のディスプレイには、金髪の少女と会食

する牛の着ぐるみ（瀕死）が克明に映し出されていた。

瀬波さんが、必勝の笑みを口元に浮かべる。

「どっ？」

その手には乗らない。

「狂気の沙汰だね」

とぼける僕に、瀬波さんは哀しげにかぶりを振った。

「女の子のためにここまで自分を捨てれる人を、わたしは他に知らない」

「本当に？ おれはひとり知ってる」

僕は、タイミング良く登校してきた委員長をスケープゴートにする決意を固めた。

「おはよ〜。って、うわ、朝から対峙してはる。なんなのこのクラス、もお〜」

両手で顔を覆って嘆く彼に、僕は心で詫びた。すまない級長。着ぐるみの配送は任せてくれ、せめてもの償いだ。

しかし二の矢をつがえているのは、僕だけではなかった。

「証拠」

「なんだって？」

「見たい？」

はったりだ。そんなものがある筈ない。

ひるむな。僕は自分に言い聞かせた。

クラスメイトが病の床で苦しんでいるのだ。

だが、彼女のこの自信は何だ？

僕が迷っている間に、瀬波さんは素早く携帯電話の画像を切り替えた。

「ど」

「……！」

僕は絶句した。

そこに映っていたのは、過日の文化祭の一幕だった。

『今年の干支』という腕章を巻いた牛さんが、学園の平和を守るために治安維持活動へと身を投じている、決定的な場面だ。

(まずい……！)

僕は焦燥に胸を焦がす。当日はアリバイトリックを用意していたものの、こちらまで調査の手が及ばなかったため、今となっては証明できない。どうする。

硬直する僕に、とどめとばかりに瀬波さん。

「ちなみに、あなたのアライバイは崩し済み。マッキーを捨て駒にする、使い古された手口。二年前のわたしなら騙されたかもしれない」

「どうやら、彼女に隠し事は出来ないようだ。勝敗は決した。僕はがつくりと机に突っ伏して頂垂れる。」

無念。そう、無念だ。

「ごめんよ、秋津さん。きみのためにりんごをすりおろしてあげる」とが、僕には出来ない……。

そして委員長のコメント。

「みつちーはさ、なんていうか、案外底が浅いよね」  
だまれ。

## 崩、帰還す

悔やんでも悔やみきれないが、振り返っているひまがあるなら明日に向かつて歩こう。

何事も前向きに。少年のモットーだ。

朝一番、寝起きでぼんやりしているマルマルをクローゼットの前まで引っ張っていき、どてらを羽織らせる。

一昨年の今頃に母が自分にと買ってきてくれたものだが、一日中を家でごろごろしている彼女ならば、より完ぺきに着こなしてくれるだろうという確信があった。

すっかり着膨れしたマルマルは、夢の世界の住人たちとの別れを惜しんでいるようで、まぶたを重く閉ざしたまま、かくかくと首を下させている。可愛い。よしよしと頭を撫でる。

背中を丸めてふらふらとベッドに惹かれゆく少女を目的地まで誘導してやり、布団を掛けてあげる。

今朝は、ひときわ冷えるな……。少年はコートの襟を正して、もぞもぞと布団の中に潜行していく少女を静かに見守る。

彼女を見ていると、不思議と勇気がわいてくる。

人生をマラソンに例えるとしたなら、自分は最後尾ではないと安心させてくれる何かが、マルマルという少女にはあった。

(大丈夫なのか、この子)

同居をはじめた当初は食っちゃ寝している少女に憤りを覚えたものだが、本当に……本当にびっくりするほど何もないので、最近は少し心配になってきた。

いくらお嬢さま育ちとはいえ、この認識は少年の中で自然と根付いたものだ、こうまで人は墮落できるものなのか。

憐れみの視線で布団の膨らみを見詰める少年であった。

「なあマキ、幸せって何だろう」

始業前の余暇である。幸福とは身近にあるものだという持論に疑問を感じた僕は、親愛なる友人に尋ねてみることにした。

すると彼は、僕の正気が疑わしい可能性を指摘してきた。

母国語も満足に理解できないらしい友人に、まず僕は正しい日本語の使い方をレクチャーしなければならなかった。

「貴様は本当に仕様のないやつだな。おれが正気でないとしたら、それはおまえのせいだよ。おまえがいらんことをするから、おれの評判が悪くなるんだ」

こいつが文化祭の実行委員などという役職に就かなければ、僕が身体を張ってフォローに奔走する必要はなかったし、ひいては秋津さんのお見舞いにも行けた筈だ。

なんのことだ、と問うてくるマキを、おまえには関係ない話だ、と突き放す。

(……瀬波さんと秋津さんには口止めしておかないと)

こんなばかのために校内着ぐるみマラソンを敢行したなど、いや、あれは母校への愛ゆえに走ったのだ。僕は思い直した。第一、悩んでいる友達を斬新な切り口から心配する友人など、持った覚えがない。

理不尽だと？ 難癖をつけてくるマキに、僕は薄く笑んだ。

「マキ」

びくつと肩を震わせる親友を一瞥して、すつと目を細める。名前を呼んだだけじゃないか。何をおびえてるんだ。

さて、どうしてくれようか……。

親友とのコミュニケーション、その具体的な手法について考えをめぐらせていると、教室のドアが勢いよく開け放たれる。

「ちっ」

興をそがれた僕は舌打ちして、ドアから入ってきた人影を睨む。

女子がびっくりするだろうが。静かに入ってこいと何度言ったら、

「っつと、失礼。勢いあまった」

秋津さん。秋津さんじゃないですか。

クラスメイトの注目を浴びて、照れくさそうにはにかむ隣人との再会に、僕は思わず席を立った。

そして、その佇まいに掛けるべき言葉を見失った。

頭の後ろで跳ねる黒髪は常と同じなのに、いつだって僕らを励ましてくれる笑顔がマスクに隠されてしまっていた。

いつも元気な秋津さんがマスクを……。

「くっ……!」

僕は、これほどまでに自分を不甲斐なく思ったことはない。目頭が熱くなる。

着ぐるみが何だというのか。たしかに色々と致命的だったが、それだけだ。

結局、僕は自分が可愛かったのだ。

保身のために現状を打破しようとは考えなかった。

それでは、僕自身が軽蔑している唾棄すべき人間たちと同じ所業ではないか。

そんな僕にすら、秋津さんは優しい。きみは天使だ。

「みつちー、朝から絶好調だね」

彼女の気遣いに、僕は何と言って応えればいい？ 慎重に言葉を選ぶ。

「秋津さん……。風邪は……。もういいのか」

「おかげさまで」

「僕は、何も……。何も出来なかった」

「おかげさまで」

秋津さんは繰り返した。気持ちだけで十分ということだろう。彼女らしい。

なんだこいつら、という目で僕らを見比べているマキを押しつけて、僕はふらふらと彼女に歩み寄る。

「熱は……」

おでこに手を当てようとすると、秋津さんは俊敏なステップを踏んで回避した。とても病み上がりとは思えない敏捷性アシリテイだった。

「かなうー!!」

ぴよんぴよんと教壇を跳ねて、相棒の瀬波さんに駆け寄る。

友人の元気な姿に、瀬波さんは安堵の笑みを漏らした。

「おはよう、メグちゃん」

麗しい友情だ。

「ところで級長、きみは驚くほど平熱だね」

「ええ、生まれてこの方、風邪なんざひいたこともありませんわ」

そうじゃないかと思ってたよ。

目と目で頷き合つ僕らであった。

## マルマル、雪上を舞う

朝から随分と冷え込むと思っていたら、やはりというか案の定、雪が降った。

初雪だ。

部活に顔を出した帰りである。コートのポケットに両手に突っ込んで帰路を急ぐ少年。

例年通りなら、本格的に積もるのは少し先になるだろうが、近頃はとみに日の入りが早いと感じる。

(もう、すっかり冬だな)

夕焼けに照らされて、庭先でくるくると回っている少女も、そういうふうを感じることもあるのだろうか。

「みつちゃん！」

満面の笑顔で駆け寄ってくる同居人を、いつもの癖でスルーしようとした少年は、ぎよっとして立ち止まった。

「ばかつ、なんて格好してる」

普段、暖房が利いた環境で自宅警備に励む少女に、季節感は何もない。

民族衣装らしき服は、大きな袖がひもで吊ってある構造をしており、それこそ雪のように白い二の腕が露出している。

どれだけの時間を舞い降りる雪とたわむれていたのかは知らないが、  
ぱちぱちと瞬きをするたびに、意外と長いまつげを彩る粉雪がはら  
りと散る。

慌てて脱いだコートを肩に掛けてやりながら、きよんとしている  
マルマルにもう一度「ばか」と  
ため息をつく。

「まったく、風邪をひいても知らないぞ。あまり世話を掛けるな」  
だが、興奮したマルマルにとっては些事に過ぎなかった。

「みつちゃん、雪だ！」

ばたばたと袖を振ってはしゃぐ少女に、少年は「そうね、白いね」  
と生返事をして彼女の手を引く。大自然のパノラマもいいが、ま  
ずないだろう外敵の襲撃に備えるという職務を忘れてもらっては困る。

未成年でありながら閑職に追いやられている窓際マルマルは、そ  
うと知らずに手のひらで溶ける雪に感動している。

彼女の母星モモルは、物質的に存在している訳ではないため、この  
ような自然の産物とはとんと縁がない。

冷気を自在に操るタイプの異星人と矛を交えたことはあるが、もち  
ろん二度と歯向かう気を起こさないよう一族郎党に相応しい末路を  
用意してやった、あの連中が生み出す雪の結晶は殺傷力ばかり高く  
て芸術性に欠ける。

世界は美しい。いまなら、ペンタモール討伐を謳う身の程知らず共

の気持ち少しはわかる気がした。

「かき氷のファンタジーだな」

それが気のせいだと気付く日はやって来るのだろうか。

「雪を見るのははじめて？」

少女の髪に掛かっている雪を払ってやりながら、少年はさり気なく彼女の出自を探る。

ぱらぱらと土間に落ちた雪は、たちまち溶けてなくなる。

「うん。わたしの母星には、そもそも自然現象という概念がない」

箱入り娘というやつか。少年はひとつ頷き、大切に育てられたんだな、とまだ見ぬご両親を思う。

マルマル自身は彼女の両親について実の娘を放逐した人でなしのように言うが、そう言う当の本人からして、あまり気に病んでいる様子がない。

醒めきっているようで、しかし確かなきずながあるように思えてならない。

口ではどうあれ、きっと愛娘を心配していることだろう。

母に任せると言った以上、出過ぎた真似はすまい。だからといって責任を免れることが許されるのは、せいぜい小学生までだろう。自分<sub>に</sub>出来ることといえば、彼女の健康を気遣う程度のことだけねど。

「風邪、ひくなよ」

ぼんぼんと軽く頭を叩いて促す少年に、マルマルはふと気付いたように言う。

「わたしは小さな子供ではないぞ」

残念ながら、大人は雪を見てはしゃいだりはしないものだ。少年は苦笑して、「そうだね」と口先だけで納得してみせた。

(それで、なんでおれが風邪をひくんだ。納得行かねえ……)

翌日のことである。

昨晚から「あれ？」と感じる症状は二、三あったものの、まさか熱が出るとは思わなかった。

久しぶりに正当な所有権を取り戻したベッドは、少女の残り香が気になって落ち着かない。すっかり僕の手を離れてしまったようで物悲しい。

「あれしきで体調を崩すとは不甲斐ない」

鬼の首を取ったとばかりに看病してくれるマルマルがいまいましたことこの上ない。

天才的な嫌がらせの手腕を発揮した少女は、今日に限って早起きだった。

本日のマルマルは、薄手のトレーナーの上からどてらを羽織り、下はキュロットタイプのスカートという出で立ちだ。

彼女が室内を行き来するたびに、ニーソックスで覆われた足がとてとてと音を立てる。

風邪が感染るといけないと言って遠ざけようとしたのだが、マルマルは頑として聞き入れなかった。

僕は、ベッドの上で熱っぽい吐息を漏らす。

「悪かったな、軟弱で」

熱を出して寝込むなんて何年ぶりだろう。普段から体調管理には気を使っていた筈なのだが、やはり受験勉強の疲れが知らず知らずのうちに蓄積していたと見える。

喉が腫れているらしく、かすれた声しか出ないのがいかにも情けない。

「しょせん有機生物の限界だ、そう気に病むな」

マルマルはそう言うってくれるが、病人を写メっている輩を気にするなという方が無理がある。

いつの間に携帯電話などという文明の利器を、と思ったが、なんのことはない、僕のケータイだった。

カチカチと通話履歴をチェックする指さばきが熟練の域に達してい

て、今日から携帯電話と寝食を共にしなければいけないのかと憂うつになる。

いい機会だと思ったのか、その精神構造がすでに僕の理解を越えている、マルマルは日々の不満を口にする。

「誰が誰かわからん」

僕は、電話帳機能に名称ではなく呼称で登録するタイプだ。人の名前を覚えるのは得意なので、それで差し支えがあった記憶はない。まさか友人らのプライバシーを守ることにつながる日がやって来ようとは、夢にも思わなかった。

いよいよメールボックスの開封に着手したマルマルが、ぼそりと呟く。メールなんて、せいぜいマキとの近況報告くらいでしか使わない。べつに見られても構わないが。

「倒錯的な遣り取りだな。ご主人の危惧も頷ける」

それは違う。僕は反論した。

やつが送ってくるメールは、徹頭徹尾が下らないのだ。いつだったか、『実は俺、宇宙人なんだ』などと訳のわからないことを相談された日には、真剣に腕利きの医師を紹介しようかと悩んだほどである。

マルマルが感心したように言う。

「仲がいいんだな」

「まあ、そこそこ」

反発する気力もわかず、僕は認めた。

いちいち爛に障るやつだし、価値観もまったく異なるのだが、それでも生まれる友情がこの世にはあるのだ。それは本当に不思議なことだった。

「例えば、こんなことがあった」

修学旅行で本当にあった怖い話を聞かせているうちに、風邪薬が効いてきたのだろう、眠気が僕を間断なく襲ってくる。

視界の端で揺れ動く金髪を最後に、僕の意識は閉ざされるのであった。

龍虎、まみえる

プリンが食べたい。

甘露への飽くなき執念で跳ね起きた自分に軽く絶望し、うつむき加減にひたいを押さえる。

「……………」

ときどき僕は、自分がひどく能天気な人間なのではないかと疑念を抱くことがある。例えば、いまがまさしくそうだ。

(プリンて)

好きなものは仕方ないとこれまでは考えていたが、事態は思ったより深刻なのかもしれない。

心の整理をつけて顔を上げると、閉めきったカーテンの隙間から差し込む夕日がまぶしい。

けっこう長い時間、寝てしまったようだ。

枕元に安置されている玉ねぎを見なかったことにして、僕はベッドの上で軽く伸びをする。

倦怠感が残っているが、熱は下がったようだ。

つきつきりで看病してくれたのか、ベッドの傍らで寝入っている少女に心の中で感謝の意を告げる。

白磁のような頬をそつと撫でると、肌のきめ細やかさにどきりと

する。

いまにも折れてしまいそうな細腕は頼りなく、やっぱり女の子なんだなと感じる。

これで、雪だるまじゃなければな、と僕は悔やんだ。

腕に見立てて突き刺された枯れ枝が、ぽとりと床に落ちた。

さしずめ代理マルマルといったところか。足(？)元に敷かれたたらいが確信犯的で腹立たしい。

底に溶けて溜まった雪水に指先を浸して、僕は独りごちた。

(まだそう遠くへは行ってないな……)

看病に飽きたのか何なのか知らないが、寝て起きたら部屋で雪だるまと二人きりだった病人の気持ち、少しでもわかってくれたら嬉しい。

行ってくる、と代理マルマルの手を握り、その儂い命に敬意を表してから部屋を出る。

ふらつく身体に鞭打って階段を降りると、玄関で仁王立ちしている金髪のか細い背中が目に入った。

声を掛けようとして、思いとどまる。

(客か?)

ちょうど少女の陰になっていてよく見えないが、土間に誰か立っている。

全貌はようとして知れないが、マルマルと向かい合っている人物は細身の少年で、年の頃は十四、五といったところか、自分とそう変わりない。いかにも文化系という風体なのに、目付きがいやに鋭い少年だった。

よくよく見ると、僕と同じ中学の制服を着ている。顔に見覚えはないので、ひよっとしたら下級生かもしれない。

何やら張り詰めた雰囲気の中、最初に口を開いたのはマルマルだった。

「おまえがマキか」

ですよね。

腕を組んで僕の友人を見下ろしているマルマルの態度は硬く、その声には暖かみの欠片もなかった。

いつもお気楽な少女という印象だったが、意外と人見知りするのか。

「……………」

だがマキも負けていない。一拍を置いてから、低い声で問いを投げる。

「あんたは誰だ。ここで何をしている」

それは、まさに急所を突いた必殺の問い掛けだった。

居間のテーブルで非業の死を遂げたプリンの空容器を叩く暇さえ、僕には与えられないのか。

僕はごく自然な態度を装って、両者に歩み寄る。

「マキ、来てたのか」

ジャージ姿で軽く片手を上げる僕に、友人の片眉が怪訝そうに跳ねる。こちらの態度から、何かを察したらしい。

(ちっ、面倒なやつ。だが……)

布石は打ってある。あとは先手を取るだけだ。僕は決断し、マキを睨み付けているマルマルのとなりに並ぶ。

どうでもいいが、こいつらは初対面の人間と仲良くしようという気はないのか。

「ああ、言ってなかったな。彼女はマルマル。親戚の子だよ」

「親戚だった？」

マキには、僕の言うことを端から疑って掛かるようなところがある。鼻で笑い、続きを促してくる。

「具体的には？」

そこまでは考えていなかったが、ここで言い淀んではやつの思いつきだ。僕は即答した。

「いとこだ」

「ふうん。おまえにいとこがいるとは知らなかった」

僕だって初耳だ。

とっさにマルマルに目配せすると、彼女はかすかに頷いた。

「血のつながりなど些細なことだ」

一瞬で窮地に立たされた僕は、開き直すことにした。顔面に貼り付けた迎合の笑顔をうっちゃり、吐き捨てるように言う。

「困ってる様子だったんでな。うちで匿ってる。ほら、正直に言っただぞ。これで満足か？」

傍らの少女の頭に手を乗せて、どうだと凄んでやると、マキはちらりとマルマルを一瞥し、

「どう見ても日本人じゃないな、いや顔かたちはそうでもないが…」

「それは、わたしの鼻が低いと言っているのか」

そこまでは言っていないだろうに。気にしていたのか。

間髪入れず噛み付いたマルマルを、マキがわずらわしそうに見る。

「事実を言ったまでだ。いちいち反応するな、うっとおしい」

「マキ」

「気に障ったなら謝る。すまなかつたな」

彼は、音速で手のひらを返した。素直じゃないんだ、とフォローしてあげる僕は、なんて友人思いなんだろう。

「性根が腐ってるんだ。許してやってくれ」

「おい」

ええい、腕を掴むな。うつとおしい。

マルマルは、僕とマキの間で視線を何度か往復させてから、桜色の唇を引き結んでふいと目線を逸らした。

へそを曲げてしまった少女の機嫌を直してやるべく奮闘する僕に、マキはこめかみに手をやって処置なしとかぶりを振る。

「おまえというやつは……。いつか、こうなるんじゃないかと思ってたんだよ」

あとで覚えている。

## マルマル、地球を守るために立つ

たなびく炎が尾を引き、常夜の海にぱつと散る。

(発火能力というよりは、念動力に近いな)

「ロストナンバーか」

知的生命体の天敵とは、すなわち「未知」である。敵を知り己を知れば百戦(略)

だが宇宙は広い。

有機生物と比べていささか(いささか)考えることが苦手な精神優位種が基盤になっている恒星間ネットワークは、なんていうか、穴だらけだ。

それはもう、宇宙の最先端テクノロジーに関してあれこれと夢を膨らませている諸兄には申し訳ないほど拙く、ずさんで、ぐだぐだなのである。

自覚はあるし、問題点もきちんと把握しているのだが、昔からずっと続けてきたことを変えるのは面倒くさいし、確実にどこかで軌轢を生じる。何より面倒くさい。

だから、星間連合のデータベースに載っていない敵など、そう珍しくはない。うっかり忘れていたのだろう。そして何人かが気付いていながらも、なあなあで済まされてきたのだろう。許されざる怠慢だが、悲しいことにわたしもなあなあで済ませる気である。

ロストナンバーというのは、そうした記載漏れの種族を指して言う。星の瞬きを縫うように、一陣の炎が視界を横切る。

(速い)

目で追えるスピードではない。

(イメージをきっかけに力を引き出すタイプか)

わたしは考える。基本的に、精神優位種と有機生物は二人で一組だ。一部の例外を除き、精神優位種はこの世に干渉できないからである。

つまり、わたしは凄いなということが言いたい。

なにしろ「窓口」次第で精神優位種的能力は限界が決まる。

(まあ、どちらにせよ……)

死角から襲いかかってきた炎を、わたしは燃え盛る片翼で引き倒した。擬態で獲得したコピー能力だが、わたしの方がうまく扱える。

のたうち回る炎は、形状的に鳥と似ている。火の鳥だ。たいいてい能力というのは肉体維持の延長上にあるケースが多い。

逃げを打たれてもつまらない。敵の頭をいまや業火と化した足で踏みつけながら、片手間に四方の空間を紅蓮の檻で囲う。

ワシントン条約的にやばそうな凶鑑に載っていない生物は、わたしの足元でなおも抗おうとする。

「ペンタモモル星人か！」

三千世界にあまた存在する生命に例外なく共通して宿る感情、それは憎悪だ。

その憎々しげな視線がたまらない。

わたしは愉悦に口元を吊り上げた。

「ペンタモールに出会ったら逃げると教わらなかったのか？ 何かの気まぐれで見逃してもらえるかもしれないと」

「だまれっペンタの亡霊め！」

よく吠える。その威勢がどこまで続くか見物だ。

わたしの縄張りに無断で立ち入ろうとした罪は重いぞ……。

「という夢を見た」

「……そう」

真夜中に叩き起こされて、夢の内容を逐一報告されるといって苦行に耐えきった少年は、両手で顔を覆った。

まず感想としては、心底どうでもいい話だった。

しかし貴重な睡眠時間（受験生）が極めて無駄なマルマルのターンに変換されたと信じたくはない。

何か、何かある筈だ……。

少年は、何かしら新しい発見をしたかった。

「きみは、なんていうか、けっこうひどいと思う」

「それは違うぞ、みっちゃん」

少年の睡眠時間をリアルタイムで削りつつ、マルマルは反論した。

「例えば、野球選手がサッカーで足を使っても反則にはならないだろう」

言っている意味がわからない。少年はそう思ったが、とにかく眠かったので「そうだね」と同意した。

我が意を得たりと頷く少女が、どこまで自分の意を汲んでくれているかは甚だ疑問だ。少年は、はじめてそのことに思い至って愕然とした。人と人はいつかきつとわかり合えると思っていたのに。またひとつ、大切なものを失った気がした。

もはや手ぶらでは寝れない。せめて彼女の人生哲学を聞いて今後の教訓にしたかった。その程度のがままは許される筈だ。

「そう……。そうだね、たしかに反則じゃない」

「である」

「……………」

「……………」

「えっ？」

含蓄ある言葉を待っていた少年は、一向に続きを話さない少女にぎよつとして顔を上げる。  
すると、彼女は首を傾げてこう言った。

「んっ？」

## 静乃、少年に未来を問う

もちろん、と僕は思う。

親友との間に隠し事は無用だ。

結果的には、アポなしで自宅に踏み込んできた常識知らずに（元）不審人物（……元？）との同居がバレるといふ不本意な結末に終わってしまったが、どのみちいずれは相談するつもりだった。いまになつて思えば、そんな気がする。覆水は盆に帰らないのだから。

親友のマキが風邪で学校を欠席したのは、その次の日の出来事だ。僕の風邪が感染したのかもしれない。悪いことをした。

ちなみに、我が家のマルマルさんはぴんぴんしている。深夜に病み上がりの同居人を無裡から起こして壮大なファンタジーの構想を披露してくれる程度には健康だ。

親友の快復を心待ちにしている僕に、秋津さんが次のように尋ねてきたのは、給食の時間である。

「お見舞いには行かないの？」

「え、誰の？」

彼女は順調に快方へと向かっているようで、今日はマスクをしていない。牛乳のパックを両手でちょこんと持つ仕草が可愛い。

「いや、誰って」

秋津さんはそう言うが、クラスメイトで病欠の子はいただろうか。いや、いない。

教室を見渡すまでもなかった。僕に見落としてはない。ただでさえうちのクラスは、他のクラスとくらべて年間を通した欠席者が少ないことで知られている。

「女子に限れば、そうね」

焼き魚の切り身を箸でほぐしながら、瀬波さんが同意してくれた。一年生だった頃とくらべて随分と箸の扱いが上達していることに、僕は嬉しいような寂しいような気持ちになる。

と、そのとき唐突に委員長が奇声を上げた。

「たまにはマッキーのことを思い出してあげてっ……………」

今日も元気だ。

「食事中に席を立つな」

給食のおばさんたちに失礼だろう。僕は、一瞥もくれずに告げた。

それから、ああと胸中で手を打つ。マキね。

いや、べつに忘れていた訳ではない。厄介事は後回しにしたい、それだけだ。

「男の友情は、ないがしろにされてなんぼだよ」

「微妙に説得力があるから困る」

切なげに言う瀬波さんは、牛乳があまり好きではない。トレイの上で寂しげに佇む健康万能飲料に、秋津さんが熱烈な視線を向けているのは恒例だ。

「秋津くん、もう一杯どうかね？」

「それがかなうの頼みとあらば」

いつもの遣り取りだ。おどけて牛乳パックを差し出す瀬波さんに、秋津さんがうやうやしく頭を垂れる。

譲渡された紙パックにストローを差し込みながら、秋津さんはお得意先の憤ましい膨らみに流し目を送った。

「つか、かなうもたまには飲みなさいね。わたしを見習うといい。ふふふ」

「ご忠告、痛み入ります。けれど、人の心配をしてる場合かしら？」  
今頃、マキはどうしているだろうか。きっと家で寂しい思いをしているに違いない。

親友の安寧を祈る僕に、色々と共通点の多い女子二人がそろって期待の眼差しを寄越してくる。なんでしょう。

二人は、異口同音に言った。

「みっちーなら、そのへんのデータを網羅してそつだよね」

いつたい僕はどこの変態ですか。  
思わずため息をつきそうになって、食事中であることを思い出す。  
代わりに箸を置き、僕は言った。

「きみたち、そういうのは家で話しなさい」

そもそも、なんだ、大きいだの小さいだの、人間の価値はそんなこととに左右されないし、生まれ持った形質を比較することにどれだけ  
の意義があるというのか。

ちらりと、教室の片隅で生徒と同じメニューを箸でつついている平  
川先生の様子をうかがう。

うかつに「成長過程をつぶさに見守ってきました」などと言おうも  
のなら、大惨事だ。

「……………」

その平川先生の様子が、少しおかしい。何事もてきぱきとこなす先  
生なのに、食の進みが普段より遅い。顔色は悪くないようだが、何  
か悩み事でもあるのだろうか。

たとえそうだとしても、生徒に胸のうちのちを明かす人ではないことを  
僕は重々承知していた。

そこで、あえて婉曲に攻めてみることにする。

食事中に失礼、ぱちんと指を鳴らし、

「保健委員、先生はお疲れだ。保健室までご一緒してさしあげろ」  
ちなみに、僕は飼育委員だ。しかしこのクラスに愛くるしい小動物が配属される気配はない。どうしろというのか。

最高にクールな保健委員（男子）が、コロッケに伸ばした箸をぴたりと止めて言う。

「おまえが言うなら、そうなんだろうな」

どういう意味だ。

彼は、後ろ髪を引かれる様子で席を立ち、教室を縦断する。

対する平川先生の反応は鈍い。

「ありがとう。でも、とくに体調は崩してないわ」

「残念ながら先生、やつの目は誤魔化せません」

どういう意味だ。

「いいから。着席なさい」

毅然とした態度で保健委員を追い返すも、一瞬ためらったのを僕は見逃さなかった。こちらの裏をかこうとして、けれど教育者として嘘はつくまいと思いき直したと、そんなところが。

いつもの平川先生なら、ありえない凡ミスだ。

「悩み事でも？」

だから僕に絶妙のタイミングで積み手を許す。

玉子スープのお椀に手を伸ばしながら、するりと核心を突いた僕の問い掛けに、平川先生がぎくりとした。

脆すぎる。本当にどうしたんだろう。

「……先生？」

本気で心配になってきた僕は、小細工をやめにして担任教師と正面から向き合う。

戦慄の眼差しで見られました。

「わたしは、あなたの将来が心配でなりません」

お手数をお掛けします。

## 聖夜、男の戦い

受験勉強が功を奏したようで、二学期の成績はまずまずの結果だった。

平均よりやや上といったところだ。

担任教師のコメント欄には『何事にも真剣に取り組む姿勢は素晴らしいのですが、協調性に富み、受験まであと一ヶ月です。規則正しい生活を心掛けましょう』とある。ところどころ日本語が破綻している気がするのだが、成績表をご覧になった母はたおやかに微笑むばかりで、この件に関してノーコメントを貫いた。

仕事帰りの父に呼び出されたのは、その次の日の晩の出来事だ。

「父さん？」

「おお、来たか。まあ座りなさい」

母を經由して渡されたのだろう成績表を固い表情で見詰めている背中、中に声を掛けると、父は僕を一瞥してから視線を再び手元に落とし、落とした。

そして直後にぎょっとして息子を振り返るといふ、完成度の高い二度見を披露してくれた。

「待て、おれの息子をどこへやった」

「誠に残念ながら、あなたの目の前にいます」

白をベースに疎らに配置された黒ぶちのボディ。つぶらな瞳が物悲しい。

まさかの牛さん再び。

変わり果てた息子の姿に、事情を察した父は、胸中に迫り来る無念を押し隠せないようだった。

「クリスマス、だからか」

「ええ。本当に申し訳ありませんが、一度でも脱いでしまったら……きつとおれの心は折れる」

そう、今日はクリスマスイブだ。

シルエットが似ていることを幸いにトナカイの魂を宿した僕は、今夜サンタクロース。

べつに、サンタさんを信じていると嘯いて寝室に引つ込んだ同居人は関係ない。なんとなく、着ぐるみの気分だったのだ。

テーブルを挟んで向かい側に正座する新種の生物に、父は慎重に言葉を選ぶ。

「大きく、なったな。本当に、大きくなった……」

「そうかな。そうかもしれない」

そうやって僕は、ずっしりとした頭部を上下させた。

少なくとも去年までの自分なら、こんなわけのわからない苦境に立たされることはなかっただろう。何もかもあいまいな世の中で、それはたしかな真実のように思えた。

わかったと、父が重々しく頷く。

「おまえがそこまで本気だというのなら、私は何も言わん。自分の信じた道を行け」

できれば引き止めてほしかったのだが、理解ある父親を持って僕は幸せ者です。

でも、と思う。

正しいことと父は言う。

しかし着ぐるみの中にいるとき、決まって僕は思うのだ。

人生に正解なんてない。だったら、僕らは何を目指して歩けばいいのだろう。

厚手の布に覆われて、本当に大切なことを見失っているのではないか。

それだけが恐ろしい。

「父さん、おれは間違ってるのかな」

「そうかもしれないし、そうではないのかもしれない」

父は、いつだって正解を教えてください。

ただ黙って前を歩く、そういう人だ。ときどき立ち止まって空を眺める、振り返りはしない。

不器用な生き方だとは思う。

僕は父の言葉を噛み締めて、のそりと立ち上がる。

「ありがとう。おれ、行くよ」

「ああ」

居間を出て階段に足を掛ける息子の背を、父はきつと見送りはしない。

けっきょく何のために呼び出されたのかさっぱりわからなかったが、何か大切なことを学んだ気がするので、これでいいのだ。

一段一段、階段を踏みしめて登る。

二階に辿り着いたときには、肩で息をする有り様だ。緊張しているのか、まるで自分の身体とは思えない重圧を感じる。

呼吸を整えて、両前足で慎重にドアノブをひねり、

「待っていたぞ、我がトナカイよ」

静かにドアを閉ざした。

きびすを返そうとする僕に、そうはさせじと少女の魔の手が迫る。

とっさに横っ飛びで回避した僕をあざ笑うかのように、彼女はゆっくりと部屋から姿を現した。

なぜ、サンタ服を着ている。

僕はつとめて低い声で尋ねた。

「なんのつもりだ」

「知れたことよ」

間髪入れずに応じたサンタマルマルが、じりじりと間合いを詰めてくる。

クリスマスにアルバイトが着ているようなミニスカートにブーツ姿だ。白い太ももが露になっでいて、目の遣り場に困る。

彼女は言った。

「わたしのためにプレゼントを用意しているのはわかっている。大人しく寄越せばよし、さもなくば……」

サンタコスチュームを身にまとっている理由にはなっていないが、ひとつだけはつきりしたことがある。

「どつやら話し合っても無駄なようだな」

楽しみすぎて眠れなかったらしい。ならば強奪してしまえという訳だ。

つくづく思う。なんてやつだ。

長い夜の幕開けだった。

## マルマル、巨悪に立ち向かう

一月に願書を提出したら、二月には受験本番だ。

模擬試験の結果は悪くないものの、この時期は気持ちばかりが焦る。

冬休みだからといって家にこもっているとどうしてもだらけるため、晴れ間を見計らい食材の買い出しがてら散歩に出掛ける。  
家を出る前にマルマルにも声を掛けてみようとしたのだが、

「M Pが……保たない……！」

居間のテレビで熾烈な争いを繰り広げている彼女に悪いと思い、諦める。

「一か八かだつ……この一撃に全てを賭ける！」

行ってきます。

通学路を少し外れて歩くと、五分ほどで住宅地を抜けて商店街の大きな通りに入る。

年末に向けて、どこも賑わっている。

スーパーで買い出しを済ませて駅前の広場で一休みしていると、遠目に担任教師の姿を見つけた。

化粧を控えめにし、普段は後ろで束ねている髪をおろしている。下手な変装だ。

買い物袋を提げて、横に小学生くらいの女の子を連れている。

あちらも僕に気付いたようで、はっとして視線を逸らした。

しかし帰り道、駅を利用するのならば、僕が待ち受けている広場は避けて通れない。チエックメイトだ。

何食わぬ顔で僕の目の前を横切ろうとする先生に、僕は声を掛けた。

「いい天気だ。そうは思いませんか、平川先生」

「くっ………！」

彼女は齒噛みして立ち止まった。

「………こんにちは、奇遇ですね」

「はい、こんにちは。その髪型も、よくお似合いですね」

「勉強ははかどってますか？」

どうやら、連れの女兒には触れてほしくないらしい様子だ。

先生と話し込む僕を、女の子は大きな瞳で泰然と眺めている。見た目より年長さんなのかもしれない。

というか、

(似てる)

平川先生そっくりだ。姉妹にしても、ここまで似るものなのか？

まあ、ありえないことではないだろうけど。

彼女は、ふっと視線を僕から外して、傍らの姉（？）を見上げた。

「シズノ、だから言っただろう」

その口調が、また子供離れしている。

「このような不測の事態を招かないよう、わたしの、」

「あ、あなたは黙ってなさい」

女の子の言葉をさえぎって、平川先生があたふたと言った。

「お子さんですか？」と僕。

「そんな筈ないでしょう!」

柳眉を逆立てる担任教師を、僕は「まあまあ」となだめて、

「先生とうりふたつですね。小さい頃はこんな感じだったのかな」

「だろうな」

当然とばかりに頷く女の子の頭を撫でて、「お名前は？」と尋ねる。  
僕は割と子供好きなのだ。

「好きに呼ぶといい」

（変わった子だな）

まさかそう来るとは思わなかった。最近の小学生は実に進んでいる。

「……先生？」

硬直している先生に目で問うと、彼女は慌てて言った。

「ええと、そのう……平川マドカ、十歳です！」

それだと、まるであなたが十歳のようなのですが……。

懸命な姉に、まどかちゃんが向ける視線は冷静そのものだ。

「マドカか。まあ悪くない」

自分の名前をそう評すと、まどかちゃんは僕に視線を戻してにやつと笑う。

「だそうだ」

「素敵なお名前だね」

名は体を表すという。どという字を書くのかは知らないが、きっと健やかに育ってほしいという願いが込められているのだろう。

誰とは言わないが、我が家のごくつぶしとは同じ道を歩まないよう願う。

「ああ、もう」

道端で頭を抱えている平川先生に辞去を告げて、僕は帰途に着く  
だった。

「そいつは、おそらくラプラスだな」

わたしを放っておいて、よその女といちゃついていたみっちゃん  
の話を総合した結果だ。

ラプラスというのは、簡単に言えば予知能力者のことである。予知  
能力そのものを指す場合もある。

精神優位種にとっての「現在」を「交通の要所」とするなら、「未  
来」とは「僻地」に近い。

未確定の部分が多く、何かにつけてノイズが走る不便な世界だが、  
それゆえ捕食者は少ない。

そんな未来の世界でしか生きられない儂い種族が獲得する能力、そ  
れがラプラスである。

ひと口にラプラスと言っても様々だが、「現在」に干渉する際は契  
約者を軸とし過去の姿を投影するケースが多い。

わたしの宇宙まめ知識に、みっちゃんはひとつ頷き、

「そう。ところで今晚、何を食いたい？ メニューは決まってるん  
だけどね」

「みっちゃんが作るのか？」

「たまにはね。気分転換になるから」

「わたしも手伝うぞ！」

「ははっありがとう。それじゃあ部屋でゲームでもしててくれる？」

ときどき思うのだが、みっちゃんはわたしをナチュラルに邪魔者扱いしている気がする。気のせいならばよいのだが。

## 少年、マキと雪道

大晦日、一人紅白歌合戦を敢行し力尽きたマルマル。

後半はぐだぐだだったけど、アマチュアにしてはうまかった。正直、銀河の歌姫と名乗るほどではないと感じたが、父と母が大層喜んでいたので個人的には満点をあげたい。歌は心だな、と独りごちる。

「年越しそば、年越しそばを……」

と、うめき声を上げる彼女を二階の寝室まで運び終えたときには、すでに日付けが変わろうかという時刻だった。

ベッドの上で丸まるマルマル（丸×4）の額にかかっている前髪を指先で払ってやりながら、後半ぐだぐだだった今年を締める。

除夜の鐘には煩惱を祓う力があるというから、これで少しは真人間に近付ければいいと切に願った。

初詣は、友人のマキと一緒にいく約束をしている。変なところで信心深いやつだ。思わず苦笑が漏れた。

はじめて会ったのが中学一年の頃だったから、付き合って三年になる。

今年の三月には卒業だ。まあ悪くない中学生活だった。少くくらは感謝してやってもいい……。

そうあれこれと思考を転がしつつ、僕は布団の中でまどろむのだった。

あいにくと、元旦は快晴とは行かなかった。  
しんしんと降り積もる雪の中、少年は校門の前で友人を待つ。

これから初詣を予定している神社は、ちょうど学校から駅前に向かう反対側の方向にある。

携帯電話のディスプレイで時刻を確認すると、待ち合わせ時間の五分前だ。

(あいつが遅れるなんて珍しいな)

とくに示し合わせた訳ではないが、待つのも待たせるのも嫌だからと集合時間の五分前には到着しているのがいつものパターンだ。先日、風邪をひいたのが堪えたのかもしれない。

一応、確認した方がいいだろうか？

手元のケータイに視線を落として、少年は考える。

(いや、まだ時間じゃないしな)

あと五分待ってみよう。

そう決めた少年の判断は正しく、二分ほどで通学路を歩いてくる友人の姿を認めた。

この寒い中をマフラーも巻かずに、上着は薄手のコート一枚という暴挙に出ている。

あの男は、あれでなかなか暑さに強く寒さにも強いという鋼のような体質をしている。うらやましいことだ。

彼は、少年が待つ校門前に到着するなり、繊細そうな容貌を歪めて

こう言った。

「待たせたな」

なぜか偉そうだ。何かにつけて、この男は偉そうである。三年間を共にした慣れもあり、少年は気にしなかった。

「さっさと行くぞ」

軽く手を振り先に立って歩く少年に、その友人は妙な難癖をつけてくる。

「おまえ、少し早く着いたからって調子に乗るな」

これが彼なりのコミュニケーションなのかと思うと、涙が出てくる。

「おれはときどき、どうしておまえと友人になろうと思ったのかわからなくなる」

「おれにはわかる」

本人にもわからないものが、彼にはわかるという。興味をひかれた。

「ために聞かせてみる」

しかし返ってきたのは、侮蔑の視線だった。

「おまえ、自分で言ったことも覚えてないのか？」

少年は後悔した。そうだった。こういうやつだ。

以前、彼には語ったことがある。

自分は、はっきり言って周囲の人間を見下している。自らを律しきれない人間、群れるしか能のない人間、他人の気持ちを考えようともしない人間、それら全てだ。

どいつもこいつも馬鹿ばかりで嫌になる。

程度の低い輩とは付き合いたくない、というのが少年の持論だ。

そんな彼が、中学一年生のある日、とあるクラスメイトに興味を抱いた。

自分と同じレベルにいる人間だと思ったのである。それは結果的に正しかったと証明されたが、同時にこうも思うのだ。

（友達は選べ、てことだな）

少年の弱味を握った友人が、これ見よがしにため息をつく。

「おれは、おまえの将来が心配だぜ」

「そうか、奇遇だな。おれもおまえの将来が心配だ」

せめてもの抵抗として言い返した少年は、すぐさま己の失策を悟った。

なぜなら、友人が何の前触れもなく笑ったからだ。

（しまった）

よこしまな笑みというのか。その微笑は悪魔めいている。

彼は、よく笑う。

穏和で礼儀正しくお人好しというのは、しかし彼の一面に過ぎない。

「へえ？ なるほど、心配ね。ふうん」

「……おまえ、その、なんだ、癖？ 直せ。委員長がたまに本気で相談してくるんだよ」

「直す？ 言ってる意味がわからない。おれは極めて温厚な人間だ」  
駄目だ。少年は諦めた。スイッチが入ってしまった彼と、建設的な意見を交わすことは不可能と言っている。

早くも諦観の念に包まれる少年を、友人は嬉々として責め立ててくる。

「なら言わせてもらおう。僕は常々思うんだが、おまえに足りないのは協調性なんだよ。他人にいちいち理想を押し付けるから、おまえは駄目なんだ」

自分の欠点を指摘してくれる友人は貴重だ。  
少年はじつと耐える。

「おまえはいまだに自分のことを天才か何かと勘違いしてるようだが、僕から言わせてみれば逆で、それは賢い生き方じゃないな」

「……へえ、それじゃあおまえの生き方が賢いとも？」

しかし物事には限度というものがある。少年は反撃を試みた。

「だったらおれも言わせてもらおう。あのマルマルとかいっつぶざけた

名前の女はなんだ。やつは例の不審者だろう。それが、なぜおまえの家にいる」

「いい名前じゃないか」

「名前はどつでもいい」

「おまえ、あの子ともうちちょっと仲良くなれないの？ あれで、けつこつ愛嬌があるんだ」

「波長が合わない。無理だ」

「それだよ。そういうところあるよな、おまえ」

再びため息をついた友人に、しかし少年は思うのだ。  
見知らぬ女に自室を占領されるくらいなら、ありのままの自分でいたいと。

## 迫る影、叶

「みっちー、かくまって!」

と秋津さんが我が家に転がり込んできたのは三が日を終えた次の日の朝である。

正月くらいはゆっくりしてもらおうと、母に代わって調理中の僕。いまは手が放せない。こんなこともあるつかとマルマルを叩き起しておいてよかった。

洗面所で歯を磨いていた金髪が、歯ブラシをくわえたまま寝ぼけまなこで廊下を横切るのが見えた。

「んむ」

「ふつうにいる!？」

秋津さんは元気だなあ。ははは。

フライパンを揺すりつつ、僕は二人の微笑ましい遣り取りに心がなごむのを感じる。

「んむ」

「うわわ、金髪。ちょちょちょお、目え見して。ぱちって、ぱちってして」

「んむう〜」

胡椒を適量、塩ぱっぱ。ほい、完成。出来上がった炒飯を皿によそい、居間のテーブルに運ぶ。

普段は台所のテーブルで食べるのだが、お客さんが来たから今日は特別だ。

秋津さんは、我が家の同居人にいたく興味をひかれたようである。いまだ半分寝ているマルマルを引き連れて居間に雪崩れ込んだできた彼女は、興奮した様子でばんばんとテーブルを叩いた。

「みつちー！ これ、なんていうの、この、これ！」

「落ち着いて、秋津さん」

代名詞のみで会話を押し進めようとするクラスメイトをなだめる傍ら、僕は歯ブラシをもぐもぐしている同居人に衝撃的な真相を告げねばならなかった。

「マルマルさん、それ炒飯と違う。わかるよ、匂いしてるもんな。でも違う、それ歯ブラシ。洗面所で続きってきて」

「んむう」

ふらふらと居間を出ていくマルマルを、秋津さんがうつとりとした目で見送る。

「前に見たときはしゃんとしたけど、家だとあんな感じなんなあ……！」

「寝起きが駄目なんよ。怪我しそうで怖いけど、叩くわけにもいか

んし」

人数分の湯飲みにお茶を注ぎながら、僕は「困っとります」と結んだ。

秋津さんは厚手のコートを脱いで、身を乗り出してくる。コートの下に着ていたのは、紺色の上下に赤いスカーフという、セーラー服を意識したファッションだ。

彼女はケータイを取り出し、

「写メ、写メっていい？」

かなうにも見せてやりたい」

「女の子ですので」

寝起きの姿は撮られたくあるまい。僕はマルマルに代わって断りを入れた。

「そっかあ、残念。てかさ、なんでエプロンつけてるん？」

「人生、何かあるかわからないからね」

「なんでエプロンつけてるん？」

ひらりと身をかわす僕を、秋津さんが返す刃でとらえる。

だが、僕の方が一瞬早い。地の理というやつだ。

「かくまうって、瀬波さんから？」

「……うん」

果たして、秋津さんは力なく頷いた。

彼女はテーブルに上半身を投げ出して、

「かなうがスパルタなんです。ついていけません」

秋津さんは、友達の瀬波さんに勉強を見てもらっている。

瀬波さんがスパルタ方式を採用したのは、ひとえに秋津さんの学力が悲哀を帯びていたからだろう。

つまり自業自得なのだが、物事には限度というものがあって、

『あ、みっちー？ メグちゃんいるよね？』

やっぱり自業自得じゃないかな。

携帯電話越しに響く瀬波さんの声に決定事項を告げるような冷酷さがあった、僕はつめいた。

「いやあ、どうだろうね。いやいや、ところで、あけましておめでとぅございます」

『あら、ご丁寧にも。あけましておめでとぅございます』

通話を引き伸ばしつつ、秋津さんを一瞥すると、×のジェスチャーを連発している。

いつの間にか背後に回り込んでいたマルマルが、自分自身をちよい

ちよいと指差す仕草。代われと言いたいらしい。

(いけるのか?)

目で確認すると、彼女は不敵に笑った。よし、任せる。

携帯電話を受け取ったマルマルは、自信たっぷりにごう告げた。

「味噌ラーメンを一丁」

秋津さん、がんばれ。

## 少年、素敵な午後の過ごし方

素敵な一日になりそうな予感がしていたのだ。

先日とうとう我が家のマルマルに友達ができた。

待望のマルマル社会復帰計画第二段である。

マキとのコンタクトがほぼ最悪の結果に終わったのは、つい先月の出来事だ。一時期はその存在自体を危ぶまれたマルマルの対人コミュニケーション能力だが、やはり同性というのが大きかったのか、秋津さん瀨波さんとは普通にお話できたようである。

やたらとマルマルに構ってくる秋津さんにはらはらしたものの、当の金髪少女はちやほやされるのに慣れているらしく、終始堂々としたものだった。

瀨波さんに関して、僕は心配していない。秋津さんをうまく隠れ蓑にしているようだが、実は可愛いものに目がないことを知っているからだ。

その点で言うなら、むしろ警戒すべきは秋津さんだと思っていたのだが、この難敵を前にして、なんとマルマルは天性の愛嬌で撃破して見せた。

後日、僕は瀨波さんから同居人の件に関してお説教されるらしいのだが、これは逆にチャンスだと自分に言い聞かせたのでまったく問題ない。

瀬波さんに連行されていく秋津さんの憐れみを誘う悲鳴が耳にこびりついて離れない。

おかげで今日は朝から絶好調、問題集がすらすら解ける。

朝食の席でニュースを観て世を憂う父も、マルマルに友達ができたと聞いて未来は明るいと感じたらしい。意気揚々と入社する父の背には、働く大人の気概が満ち満ちていた。

食器洗いを済ませたら、次は掃除機と洗濯機が僕を呼んでる。我が家を縁の下で支えてくれる力強いパートナーたちだ。

彼らの助けを借りて午前中に細々とした家事を片付ける。

何もかもがうまく回る。身体中を駆け巡る全能感に僕のテンションはうなぎ登りだ。

「まだだ、まだおれは動ける……！」

「……………」

デジタルオーデオとケータイを両手で同時に操作している現場をお目覚めマルマルに目撃されるも、僕は止まらない。

「おはよう、マルマル。いい朝だな。ほぼ昼だが！」

「どっつしたの、この子……………」

気味悪がる母の肩を揉み、本日の自分は言つなれば過去最高の出来であることを述べると、マルマルが抜け目なく欲しい服があるとね

だっってくる。

「試してみたいことがある」

僕は自嘲して立てた親指を突き出す。あとで後悔することはわかっていたが、それでも今というこのときを大切にできなかったのだ。

「仕方ないな。だが、僕はきみが思っている以上に金欠だぜ？」

「案ずるな、せいぜいみつちゃんの財布にとどめを刺すくらいだ」

「まじかよ」

母と連れ添ってデパートへ出掛けるマルマルを見送る。さようなら、僕のお年玉。

だが、綺麗に着飾ったマルマルを見るのも悪くないと最近の僕は思うのだ。

近頃の僕は心が広くなった、成長したということだろう。破滅の入り口に立っていることは自覚しているが、いつの世も滅びは甘美な囁きをともなつて人をいざなう。

歴史は繰り返すというなら、それは人間のサガなのだろう。運命に逆らうのは英雄だけでいい。

と、ここまでは良かった。

全世界の祝福を浴びているような気分散歩に出掛けた先で、僕はいま。

「天使さまぁー！」

路上で見知らぬおっさんに崇拜されている。

「……………」

ここはどこだ、奈落だ。

春には満開の桜が臨める

桜並木通りを散策している最中の出来事だった。

市内に数あるデートスポットの定番のひとつだが、人通りが異様に少ないのは枯れ木の寂しさゆえと信じたい。

唯一の観客が、担任教師とその妹さんというから、その悲劇に拍車を掛けている。ここで僕の学園生活に終止符が打たれるのだろうか。

ひざ丈スカートから伸びる脚線が美しい平川先生、サバイバルゲームがご趣味とは知りませんでした。

遠目にもはつきりと玩具とわかるモデルガンを油断なく構えたまま、先生は困惑した眼差しを僕に向けている。

「マドカっ?」

傍らの妹さんを問い詰める声も切迫している。

答えるまどかちゃんも戸惑った様子である。

「わからん。分配機は正常に作動している。まさか、あの少年が宿主なのか? いや、しかし」

だけど、わかって欲しい。一番混乱してるのも、泣きたいのも、可哀想なのも、ぜんぶ僕なのよね。

その悲しみの元凶たるおっさんが、狂気を宿した目で二人を振り返る。

「馴れ馴れしいぞ、連合の犬ども。神の使いの御前だ、控えろ」

そのお犬さんとやらの僕の進学が懸かっている、この現状。

よほど僕に恨みがあるらしいおっさんは、立ち上がると思ったよりもすらりとしていて上背がある。髪を後ろに撫で付け、びしっとスーツを着こなしている。こんな大人になりたいと思っていた時期が僕にもありました。

働き盛りのご年齢とお見受けしますが、お仕事の方はいいんですか。

平坦な声で尋ねると、知らないおじさんは嬉々として言った。

「私は、あなた様と出会ったために生まれたのです」

なんて憐れな人生なのだろう。僕はうめいた。

この国では宗教の自由を憲法として掲げているが、これはあまりにもひどすぎる。

ひざまずき、僕の手を取ろうとする迷える羊を、平川先生が制した。

「その子から離れなさい」

モデルガンを男性に突き付ける、その姿が勇ましい。せめて、もう少しリアリティーを追求して欲しかったと願うのは、僕のがままなのだろうか。銃身すらないなんてあんまりだ。リボルバー拳銃でいうところの撃鉄が機械的な動作音を立てて斜め上後方に伸びても、何の慰めにもならない。

まどかちゃんの最終通告が寒空に虚しく響く。

「抵抗しても無駄だ。きさまの能力ではわたしには勝てんぞ。署で洗いざらい喋ってもらおう」

シチュエーション的には追い詰められている企業マン、法的には問題ないのが難しいところだ。

彼は何かつらいことでもあったのか、大仰に両腕を広げて笑い出した。

僕もつらい。マルマルさん、今どうしてますか。僕はおうちに帰りたいです。

平社員とは思えない堂々たる口調で、日本経済を支えるビジネスマンが言う。

「貴様たちは何もわかっていないようだな。私を捕らえたところでどうにかなると思ってる」

引き金に掛かっている平川先生の指に力がこもる。

「わたしには関係ない話ね」

「関係ない」

帰りを妻子が待っているかもしれない男性は、おつむ返しに呟いた。笑いはぴたりとやんでいた。

「関係ない、そうかもしれない。その表現は的確だぞ。なぜなら、この時空の支配者は明白だ……」

そう言って、囁くように付け足した。

「驚くほどに」

すると、まどかちゃんが弾けるように反応した。

「まさか、特異型か!？」

空が青い。どうして青いんだろう。

「宿主などいるものか。まだわからないのか？」

この方は分配された『こちら側』にいる。導かれてだ!」

雲が白いのは、なぜなんだろう。

「人間の、未知の能力……! それを狙いだっただのか!？」

慄然としたまどかちゃんの悲鳴を合図に、事態は動いた。

「マドカ!」

叫ぶと同時に平川先生が引き金を絞り、

「ラプラスか」

知らないおじさん人員増加、

「遊びが過ぎるぞ」

更に追加。

まどかちゃんびっくり。

「タイムトラベラー……！」

平川先生は困ったように、

「時の流れって残酷ね」

僕もあっち側に行きたい。

おじさん三人にひざまずかれて、僕は異性の存在を恋しく思う。

「可能性には敬意を払う。だが、俺はあんたを認めた訳じゃない。覚えておけ」

ひとり、ツンデレが混ざっていました。

颯爽と駆け去るダンディズム三人衆。

「待てっ」

追う、まどかちゃん。

それに付き添う平川先生が、脇を通り抜けざま、労るように僕の肩をぽんと叩いた。

「悪い夢だったのよ。忘れなさい」

ひとり取り残された僕は、とぼとぼと帰宅し、マルマルのひざの上で、少し泣いた。

## 叶、マルマルの身を案じる

長いようで短かった冬休みが終わり、今日から三学期がはじまる。

と言っても初日は始業式とHRだけなので、昼前には解散だ。

帰りの支度を整える少年に、委員長がぎこちなく話しかけてくる。

「みつちー、午後ひま？」

「ひまで悪いか」

わら半紙のプリントを整頓していた少年は、その手を止めて委員長を振り返った。

「どうしたの、改まって」

ときどき忘れそうになるが、自分たちは受験生だ。

高校受験を一ヶ月後に控えたこの時期、遠出する予定なんてある訳がない。

「そう、ひまなんだ……」

落胆を隠せない様子の委員長に、少年は念のために言う。

「とくべつ用事はないって意味だよ？」

その声に劣るような響きがあって、委員長は悲しくなる。

「気のせいだったら、ごめん。おれたち同級生だよね?」

「それじゃ、また明日」

「え、今じゃ駄目なの」

ひらひらと手を振って教室をあとにしようとする少年だったが、

「みっちー、午後ひま?」

廊下で待ち伏せに遭う。

硬直した少年に、にこりと微笑みかけたのは、副委員長の瀬波叶だった。

少年の友人に勝るとも劣らないポーカーフェイスの使い手で、所作は大人びているのだが、たまにぼんやりしているというか、ひどく幼く見えることがある。

何を考えているのかいまいちわからない、ぶっちゃけ怖いんだよ、というのが敬愛する級長の言である。

近年まれに見る笑顔で返事を待つクラスメイトに、少年は頭の中で素早く逃走経路を組み立てながら、

「忙しいと言ったら……」

「内容によるかな。でも」

叶は間髪入れずに答えた。

「ひまで悪いか、でしたっけ」

「図つたな委員長っ」

烈火の如く教室を振り返ると、ロッカー側の出入り口から今しも裏切り者が脱出せんとしている。

「待てっ貴様……！」

これを好機と見てあとを追おうとする少年の前に、叶の相棒が立ちふさがる。

「先日はどうも」

トレードマークのポニーテールが頭の後ろで跳ねる。

秋津萌。屈託ないクラスメイトが、今や復讐に燃える女豹と化していた。

「しまった……！」

退路を絶たれた少年が、無念の声を上げる。

前門の虎、後門の狼とはこのことか。

叶の笑顔は鉄壁、崩れない。

（虎は無理、虎は無理）

即座に決断を下し、少年は狼さんの懐柔にいちるの望みを懸ける。

「秋津さん、おれはね、きみのためを思って」

「あ、そうなの？」

手応えあり。うんうんと頷く少年。ゆっくりと伸びてくる叶の手に、嫌々と後ずさる。

背中越しの説得だけが頼りだ。

「そう、心を鬼に。甘さと優しさは違うんよ」

「それじゃあ、そういうことで」

「え、そういうことってどういうこと。あ、そういうことか。駄目じゃん」

説得は失敗に終わった。

しかし少年は諦めなかった。

「マキくん！ 助けてくれないかっ」

自分は一人じゃない。いつだって頼れる親友がそばにいてくれる。

肩越しに振り返れば、ほらそこに、

「いねえっ！」

どういうことだ。なぜいない。狼狽する少年に、朧の悲痛な宣告が突き刺さる。

「マツキーは妖精さんを探しに行きました」

「え、おれの親友、そんなに遠くに行っちゃったの？」

親友との距離感が一気にぼやける少年。いったい何があった。

しかし叶は言うのだ。

「その妖精さんは、これからわたしにお説教されます」

## 妖精とマキ

少年がいわれなき罪に問われようとしているとき、

（妖精だと……？）

友人のマキは、母校にひそむ謎へと挑んでいた。

事の起こりはこうだ。

マキは、卒業アルバム制作委員会に名を連ねている。

発端は毎度のように友人の口車に乗せられてだが、やるからには手抜き妥協は一切しない。

体育祭に引き続き文化祭で要職を務めた彼が、委員会で長の座に就いたのは、ごく自然な流れだった。

まず、友人でも何でもない他人の指示に従って動くのが嫌なのだ。自分で指揮した方がよほど効率いいし、全体を把握できるぶんトラブルに対処しやすい。

そんな彼も、病気には勝てなかった。

二学期の末にひいた風邪は、鉄人とも噂される友人を病状へと追い込むほどであり、立って歩くことすらままならなかった。

病原菌と思しき友人は半日寝たら治ったというから、つくづく呆れる。

病の床で友人を呪うマキ。

結果として卒業アルバムの制作が滞ってしまうかと思われたのだが、

そうはならなかった。

何者かが自分に代わり指揮を取ってくれたのだという。

さすがに進捗は少し遅れたが、自分にはあまり向いていない根回しの面をカバーしてくれたので、正直かなり助かった。

では、その指揮を代行してくれたのは誰かということ、委員会の生徒は声をそろえて、

「妖精さんが」

と言うのだ。

この学校はもう駄目だと思った。

卒委（卒業アルバム制作委員会の略称）のメンバーは、当然三年生が中心になっている。

同級生に見切りをつけたマキは、新学期の始まりを待ち、写真提供の新聞部に足を運んだ。

幸い、その部長はクラスメイトである。

突然の訪問を歓迎してくれた彼は、次のように述べた。

「悪いが、<sup>ソース</sup>情報源は明かせない。この業界は信用が命だからね」

わかったのは、同級生の偏差値が予想を下回っていた程度だ。

期待したおれが馬鹿だったときびすを返すマキに、部長が再び声を

掛けたのは単なる気まぐれだったのかもしれない。

「言えない。だが、きみたちには借りがあるからな」

肩越しに振り返るマキに、彼は勿体ぶって告げたのである。

「妖精だ。そいつは文化祭にも出没した」

彼が言い終わる前に、マキは退出した。

そして現在、教室に置いてきた上着と鞆を取りに廊下を歩いているところだ。

しかし冷静になってみれば、実際この学校には何かがあるのかもしれない。

卒委の連中と新聞部の意見が一致したということは、考えてみれば不思議なことだ。両方にあらかじめ根回しでもしておかないと、こうは行かない。

だが、そんな無意味なことに労力を注ぐ馬鹿がいるだろうか。いないと信じたい。

（妖精か。覚えておこう）

そう結論を下して、教室のドアを開く。

室内を一瞥するなり、マキは瞑目して天を仰いだ。

「正座つ……………」

自分が不在の間、唯一無二の友人が教壇で正座していたという、その事実がマキを打ちのめしたのだ。

背中に哀愁さえ漂っている友人を、女子二人がそろって腕を組み見下ろしている。

マキは、たまらず声を掛けた。

「瀬波、秋津。何してる」

答えたのは叶だった。

彼女は腕組みをとき、腰に片手を当てて言う。

「マツキーは知ってるの？」

マキはあえて直答を避けた。歯噛みし、その場で床に突っ伏す。

「だから言っただろう、いつか痛い目を見ると……！」

「そうね、言ったね、言ってたね……」

力なく項垂れる友人の姿が痛ましい。

その反応で確信した。十中八九、あの女の件だろう。

少年とマキの視線が交錯したのは、ほんの一瞬の出来事だ。

足がしびれたふりをして、少年が後ろ手に指を屈伸させる。

(話を合わせろ)

というサインだ。  
逆転の秘策があるらしい。

それを確認したマキは、おもむろに立ち上がると、ひざのホコリを払うふりをして指先で軽く壁を叩いた。了承という意味だ。

少年の弁明がはじまる。

「あのね、あの日はたまたまなの。たまたま親戚が、そう親戚が遊びに来て泊まってたっていう、ごくありふれた日常をおれは大事にしたい」

切々と訴える少年に、叶は「そう」と言葉少なに頷く。ひとかけらの信頼も窺えない、無機質な声だった。

(なんて女だ)

クラスメイトの言うことに耳を傾けないとは、とんでもない女狐である。

マキは、すかさず友人をフォローする。

「まったく似てないから、おれも最初は疑ったんだがな」

「……本当に？」

叶の視線には色濃く猜疑心が混ざっていたものの、彼女の確信にひびを入れることはできた筈だ。

少年は慎重である。

彼は、あえてマルマル親戚説を強調しなかった。

「うん、実家の親御さんと喧嘩したらしくてね」

「そうなんだ……」

呟く叶の声には、険悪なものを感じない。

（ちよろいぜ）

胸中で喝采を上げる男二人。

（ナイスおまえ！）

（ナイスおれ！）

叶が萌を振り返る。

萌が重々しく頷く。

互いを称え合う男たちに、叶は申し訳なさそうに言う。

「じゃあ、さっきの『通し』には何の意味が？」

本当にどういつ訳なのさ……。

のちに萌は迷懐する。

無言で少年のとなりに正座するマキが、ひどく印象的だったと。

## 少年の秘策

話し合いの結果、休日に僕の家で勉強会を催すことになった。

その日は用事があると逃げを打つマキ（親友）に便乗して急用を思い出そうと試みたのだが、あいにくと週末は温泉旅行へ出掛ける両親に留守を任されている。

両親はマルマルも一緒にどうかと誘ったのだが、彼女はきっぱりと断った。

地球に不時着した際にペンタなんとかの気配が観測されている可能性があるとか言っていた。

ようは家でごろごろしていたいのだろう。

かくして今日、首尾良く僕の部屋に潜入を果たした秋津さんと瀬波さんは、マルマルのお世話を買って出ている。

女三人集まればかましいと言うが、この三人も例外ではないようだ。

なぜかメイド服姿で参上した秋津さんが、マルマルの髪を編み編みしている。

「ここまで長いと、手入れ大変じゃない？」

秋津さんも瀬波さんも、クラスの女子では髪が長い方だが、それもマルマルほどではない。

マルマルは事もなげに答える。ちなみに本日の彼女は、いつぞやの

民族衣装みたいな白いワンピースをお召しになっている。

「まあな。だが、みっちゃんが似合ってると思うから仕方ない」

言った覚えはないが、あそこまで伸ばした髪を切るといっのも勿体ない話だ。

「みっちゃんとな」

くそ……だから嫌だったんだ。

屈辱的なニックネームを耳にして、わざとらしく口元に手を添えた秋津さんがにやにやと僕を見る。

仕方なく僕は言った。

「母がおれをそう呼ぶんだ。面白がって真似するんだよ」

「小学生のときはそう呼ばれてたって聞いたことある」

湯飲みを両手で丁寧に扱いながら、瀬波さんが暴露して下さった。上はセーター、下はデニムのスカートというカジュアルな装いで、僕の急所を的確に突いてくる。恐ろしい人だ。

三人は、テーブルを囲ってクッションに座っている。

僕が部屋で唯一の椅子を使っているので、瀬波さんが僕に視線を向けると自然と上目遣いになる。

リップをつけているらしく、瑞々しい唇がかすかに上下する。

「ろくに友達もいなかったと」

「ちょっと秋津さん、この人止めて？」

「緊張してるんよ。な、かなう」

「え、緊張した結果がこの毒舌トークなの」

秋津さんがテーブルに身を乗り出して、励ますように相棒の肩を叩いた。

「メグちゃん……」

元気付けられた瀬波さんが、「うん」とはにかんで頷く。

ちらりとマルマルを一瞥する仕草がいじらしい。

自己紹介したきり途絶えていた国交を再開する気になったようだ。

でも、その決意を固めるためのワンクッションにされた尊い犠牲があったことは忘れないで欲しい。

「かなうとめぐみは、みつちゃんと小学校が別なのか？」

ほら、食い付いてきた。せっかく瀬波さんが勇気を出したのに、どうするの、これ。どうするの。

固唾を飲んで見守る僕。

すると瀬波さんは、切なげに僕を見上げて、

「みつちは、いつもそう」

「どうなの」

具体的に聞きたい。

僕はため息をついて、なんだか最近ため息ばかりだ、ゆっくりと席を立つ。

「三人とも、お昼は焼きそばでいい？」

母がいない以上、僕が作るしかあるまい。

マルマルをコーディネート中の秋津さんが目を丸くして言う。

「みつちー、料理できるの？」

同居人が余計なことを言い出す前に、僕は片手をひらひら振って注意をひく。

「焼きそばくらいなら。味は期待しないでね」

「みつちゃんの料理はうまいぞ」

そう来ると思ったぜ。

僕は爆弾娘をにこやかに手招きして、

「タイム。マルマルさん、ちょい来て」

何ぞ何ぞと素直に近寄ってくる彼女の肩に腕を回して、ひそひそと耳打ちする。

(昨日言ったでしょ。おれ、主婦キャラとか嫌なの。あと宇宙ネタ禁止な、これは守れてる、偉い)

(見くびるな。わざと正体をバラすような真似はしない。もっと誉める)

(よしよし、偉い偉い)

三つ編みマルマルの頭を撫でてやり、彼女をヘッドロックから解放する。

「よし、行け。くれぐれも……わかるな？」

「ふっ、任せろ」

力強い返事にむしろ不安を煽られたが、まあいい。

主婦キャラうんぬんは僕の本音ではあるが、しょせんはカモフラージュに過ぎない。

あくまでも本命は大宇宙から受信している電波ネタだ。

瀬波さんは鋭いから、マルマルが隠し事をしていることに感付く恐れがある。

そこで僕が考案したのが秘密の二重底である。

## 新たなる脅威

少年がフライパンを返している頃、静乃はアルバイトに勤しんでいた。（公務員）

彼女は、市内の中学校で教鞭を執っている教師だ。担当科目は現代国語で、現在は三学年の主任を務めている。

校内きつての美貌で知られる静乃は、一方で校内随一のスパルタ教師として名を馳せている。

例えば、道を踏み外しかけている少女を補導するために得体の知れない銃器を突き付ける程度には厳格だ。

「観念なさい」

その氷のような眼差しに、真水慶はたまらず待ったを掛けた。

「タイム！」

両手で×印を示して、一時休戦を申し出る。

脱色した髪を肩口で切り揃えた、勝ち気そうな少女だ。

静乃の返事を待たず、肩でクスクス笑っている小人に約束が違うと食って掛かるものだから、成績表に落ち着きがないとよく書かれる。

「ちよつと、あの玩具みたいな銃はなに？ 撃たれるとどうなるの？ もしかして死んじゃう？」

すると小人が、背中に生えている二対の羽を小刻みに震わせて言う。青み掛かった光沢のある髪が特徴的なピクシーだった。ちなみに、頭頂部から伸びているウサギの耳は触覚をイメージしている。

彼女は、慶の不運に笑いが止まらないようだった。

「あれはポインター。簡単に言うと、撃った相手を弁護士まで直行便でご案内してくれる。とても環境に優しいのよ」

「……………」

慶は妖精の言葉をしばし吟味してから、お手上げというように肩をすくめた。

いささか学力に難がある契約者に、妖精はウサ耳をひくつかせて謝罪した。

「ごめん、ケイには少し難しかったわね。結論を言うと、今日から前科一犯よ。おめでとう」

今度は理解できたらしく、冗談ではないと慶が言う。

「え、意味わかんない。未成年なんだけど」

「ほいほい契約するからそついう目に遭うのよ」

「あんたが言うな」

仲違いをはじめめる少女と妖精に、静乃は呆れた。

「シズノ」

傍らのマドカが注意を促してくる。それにひとつ頷きを返し、

「わかってる」

静乃に憑いているマドカの能力は未来視だ。

より正確に言えば、高精度な演算能力である。

常に先手を取れる強力な能力だが、その反面、後手に回ると弱い。いかに未来を見通せようと、肉体的な限界があるからだ。

「タイム終わり！」

慶が律儀に戦闘再開を告げて、その場を飛び退く。

普段は往来が激しい駅前を通りだが、いまは無人だ。

人間の意識から半歩外れた世界を慶は渡り歩ける。もちろんそれだけではない。

「おいで」

慶が虚空に片手を差し出すと、彼女の影が異形の群れと化して押し寄せる。

ワールドポーターと、そう呼ばれる能力だ。

「タイム！」

今度はマドカが一時休戦を申請する番だった。

彼女は慶の承諾を待ってから、静乃に詰め寄る。

「シズノ、なぜ撃たない」

ラプラスの前では、奇襲も回避行動も意味を成さない。  
撃てなかったのではない、撃たなかったのだ。

静乃はポインターをおろして、呟いた。

「まだ子供だわ」

「いや、それはそうなのだが……」

そんな身もふたもない。マドカはうなづいた。  
たしかに子供で、そして静乃は教育者なのだ。  
しかも相手は契約者としての日が浅いらしく、何ら脅威にならない。  
それを言えば静乃も初心者同然なのだが、彼女には支給された数々の  
装備と、何より得難い聡明さがあつた。

慶の肩に止まっている妖精が「カツコイイー！」と喝采を上げる。

「そうそう、前途ある若者のためにもここはひとつ」

茶々を入れられて、マドカががなる。

「だまれっウサ耳！」

「フェアリーキック！」

「ぐはあっ……！」

どうやら禁句だったらしい。飛来した妖精の飛び蹴りをまともに食らって、悶えるマドカ。

本来この世界に属していないワールドポーターと、ラプラスは相性が悪い。

掴み合いの喧嘩をはじめめる精神優位種族たちの骨肉の争いを、静乃と慶は温かく見守るのだった。

## ままならない世の中

「がんばる秋津さんを見てると、おまえがいかにかに下らない人間かがわかってくる。努力しない人間に価値はないな」

「自覚がないようだから言うておくが、おまえの成績が平均以上をキープしているのはおれの弛みない努力の成果だぞ」

少年とマキが教室で他愛ない世間話をしていると、相づちを打っていた委員長が唐突に嘆きはじめる。

「おれは、この三年間で何も成し遂げられなかった……」

そんなことはないと言ってやれたらどんなに素敵なことだろうと、少年は思う。

「……………」

深刻な表情で黙り込む級友に、委員長は求めていた反応とは違つと異議を申し立てる。

「いや、何かあるでしょ。何か言うてよ」

「委員長……………」

二の句を継げずにいる少年に、委員長は傷付いたような表情をした。

「それ！ あなたたちが無意味にプッシュしてる委員長キャラのせいで、おれは損をしている」

「例えば？」

少年の机に片手をついて佇むマキの声は鋭く、一切の容赦がない。カミソリを喉元に突き付けられたような、独特の存在感がある。

少しひるんだものの、委員長は続けた。

「委員長なのに勉強ができないとか、しっかりしてないとか……果てには委員長なのに元気とか！」

言っているうちに段々と思い出してきたらしく、勢い込んで少年の机に平手を叩き付ける。

「委員長なのに元気で！」

猛り狂う委員長に、少年が声を掛ける。

「どうした、珍しくキレてるな」

「その顔！　なんで嬉しそうなの。そんなにおれの不幸が楽しいの。この悪魔っ、みっちは鬼子だよっ」

鬼子ね……。

ますます笑みを深めて、少年がゆっくりと椅子を傾ける。組んだ足のひざの上で、指先が閃くように踊っていた。

人の不幸は蜜の味というが、おおむねその通りだと認めざるを得なかった。何も人間に限った話ではない、生きとし生ける生物は他人

の幸福に快感を覚えるほど奇怪な生態をしていないという、単にそれだけの話だ。

とっさに目を逸らした委員長を窮地から救ったのは、意外にも副委員長長の瀬波叶だった。

「うるさい」

と一言、委員長を冷たく一瞥する。

あいにくと童顔のため凄みはなかったが、常日頃から躡られている委員長は震え上がった。

次いで、叶は少年を睨み付ける。

「……………」

「ん？」

彼は即座に冷笑を解凍して微笑みに変換すると、首を傾げて無関係を装った。

さも人畜無害そうな顔をしているが、この三人の中で飛び抜けて残酷なのが彼だ。

叶は少年との衝突を避けて、マキに言う。

「マッキー。いま、わたし少しナイーブになってるの。そっとしておいて」

マキは片眉を上げて、ちらりと萌の様子を窺ってから快諾した。

叶と仲が良い秋津萌が、誘拐犯からの要求を逆探知している刑事のようなジェスチャーをしていたため、自分たちの手には負えないと判断したのだ。

少年と委員長を伴って、自分の席へと移動する。

数ヶ月前、中学生生活で最後の席替えだからと好きな者同士で班分けをした際、前列か後列かで意見が分かれた少年とマキはあえて同じグループに属することをよしとしなかった。

そういうところが、この二人にはある。

かくして無事に退避を終え、委員長がほつと胸を撫で下ろす。

「うわあ、びつくりした。機嫌が悪いと八つ当たりするんだよ、みっちーの影響でしょ」

本人がいらないところで陰口を叩くのは、委員長の悪い癖だ。陰湿な悪意こそ感じないものの、見ていて気分の良いものではない。マキは無然として言う。

「一緒にするな。こいつは八つ当たりなんて絶対にしない。他人にまるで期待してないからな」

「マキくん、人を冷血人間みたいに言うのはよしてくれないか」

知ったふうな口を叩くのは、マキの悪い癖だ。すかさず反論した少年だったが、友人の眼差しは思いのほか真剣である。

「委員長はな、最悪の場合おまえが何とかしてくれると思ってる。」

はっきりと言っておいたほうがいい。瀬波に何をした」

「決めつけるな」

少年は憤慨する素振りをしつつ、内心で舌を巻いた。ほぼ当たっている。

叶の不機嫌の理由は、先の勉強会でマルマルとお近付きになれなかったことに起因する。

緊張して全然喋れなかったらしい。

拳動不審な叶に、すっかりマルマルも警戒してしまった。

お互いに会話の糸口が掴めないものだから、「あー」「だの」「うー」だの言い合っているうちにお開きになってしまった。

あまりのポンコツぶりに、少年は崩の家庭教師を買って出ねばならなかった。

意外と言えば、まあ意外な結果だった。

## 夢見るラプラス

特異型には干渉しないというスタンスを星間連合はとる。

それには様々な理由があるのだが、まず第一に共存が困難である。

精神優位種族には、その特性に応じていくつかの分類がある。

ほぼ全体に共通して言えるのが、意識のみの存在であり、物質世界には干渉できないということだ。

そこで彼らは、有機生物の精神に寄生し、優位種ならではの超常的な能力を貸し与える、つまり物質世界への「窓口」を得る。

その「窓口」となる有機生物を、彼らは「契約者」もしくは「宿主」と呼ぶ。

しかし何事にも例外はある。

契約者を必要としない、極めて特殊な能力で現世に干渉できる種族。

これを、一般的に特異型と呼ぶ。

代表例としてまず挙げられるのが、特異一種のペンタモールだろう。

とうに絶滅した種族ではあるが、確率を支配するという絶大な能力を有していた彼らは、その能力ゆえに「窓口」を必要とせず、従って有機生物の管理下で必然的に生じる制限をまったく受けなかった。

過去、未来においても比肩しうる者はいないだろう。最高位の能力「特異一位」と称されるゆえんである。

そんな彼らにも、終焉のときは等しく訪れる。

その当時、下位種族と目されていた現ペンタモールの反乱である。

現在「特異二種」と呼ばれている彼らの能力は、他者の特性を模倣するといふものだ。

しかしそれは飽くまでも彼らの言い分であり、本質的には「特異一種」と同じ性質の能力だとされている。

旧ペンタモールを打ち破った、対抗しえたというのも理由のひとつだが、何よりも同じ環境で生まれ育った種族がまったく異なる方向性の能力を獲得することはありえない。

それでも彼らの主張が公に認められたのは、ひとえに星間連合が特異型との不毛な争いを嫌ったからだ。

もうこの際だからぶっちゃけてしまうと、列強の特異型は基本アホなので、うまくヨイシヨイして遣り過ごしたいのである。

というか精神優位種は例外なく基本アホなのだが、特異型は特筆すべきアホなのだ。

しよせん肉体もなく、そのへんをふらふらとして生きている連中なので致し方ない。

わかってもらえただろうか？

などと、我が契約者さまに長々と説明をしたところ、彼女はわたしを冷たく一瞥し、

「だから学校に来たの？」

と、おっしゃった。

校内を探検していたのがバレて職員室に連行された先の出来事である。

一向に良くなるない風向きに、わたしは開き直って言う。

「ふっ、特異型なら辿り着けなかつたろう。だが、わたしは違う」

この身は六歳児なれど、わたしは立派な社会人なのだ。ひとりでお留守番とか、ありえないと思う。

ラプラスをなめるなど言いたい。

未来が視えるのだ、ひとり遊びもままならない。

仕事を下さい。

「という訳で、上からの命令でな。仕方なく、あの少年の監視に向いたのだ」

結果、よくわからないことがわかった。

さすがに教え子のこととなれば他人事ではない。

シズノはかすかに興味を示した。

「彼は普通の子です」

「異世界に侵入できる人間がか？」

星間連合の現地工作人員に支給される装備の大半は、他種族の能力をどうにかして再現したものである。

何かと世間がうるさいので、非殺傷、不可視性に優れた逸品揃い。

とくに分配機、正式名称ポータルアバター「銀河3」（宇宙的単語なので自粛）は、再現率の高さとメタリックな意匠が人気のモデルだ。

その結界を突破してきたということは、すなわち？「契約者」？「能力者」？「その他」の三択しかない。

そしてこの星に不法滞在している、仮に星人エックスとしよう、そいつが特異型だとすれば、宿主はいないことになる。

特異型にとって契約者など足枷にしかならないからだ。

まさか寢床に困ってなどということはあるまい。

そもそも同じ優位種のわたしなら、契約者を見れば一目でそれとわかる。

なんかオーラが違う。

あの少年には、なんていうか、そういう契約者特有の、だるだる感

？ がなかった。

つまり、あの男たちの証言をあてにしてやっていくしかないのである。

「……………」

わたしの反論に、シズノは少し考えてから白旗を上げた。

「まあ、そういうことにはしておきまじょう」

よし、方針は固まった。

わたしは重々しく頷き、

「とりあえず現状維持で」

## 運命の齒車

夜、部屋でひとり机に向かってしていると、無性に外気に触れたいくなる  
ことが僕にはある。

無人の道路とか、静寂な空間が好きなのだ。

息抜きがてらコンビニにでも行こうと腰を上げる。

ぐっすり眠っているマルマルを起こさないよう、そろそろと上着を  
羽織る。

ベッドの上でごろりと寝返りを打ったマルマルが、むにゃむにゃと  
寝言を言う。

「あんまん……あんまんを……」

僕は苦笑して、さも「どんな夢を見てるのかな？」といった風情で  
彼女の要求を無視した。

そもそも、僕のお小遣いは数多のマルマル機関を通してから渡され  
るといふ絶望的なシステムが定着してしまったため、表向き僕は文  
無しなのだ。

表向きというのは、まあつまり、マルマルをうまくおだてて、さて  
行こうかな。

玄関に鍵を掛けて外に出る。

空を仰げば、ちょうど満月だった。いや、少し欠けているか。

二月の深夜だ。大気は冷たく、けれど静かで澄んだ感じがする。

さすがに人通りはないと思いきや、コンビニが近づくにつれて疎らに若者が集まってくる。

考えることは皆一緒という訳だ。

ガラス越しに店内を眺めると、お菓子を吟味している秋津さんと、そのとなりで買い物カゴを提げてやれやれと片手を腰に当てる瀬波さんを発見。

二人ともトレーナーの上から申し訳程度にコートを肩に引っ掛けたラフな格好だ。

(車か。保護者が別にいるな)

素早く推測した僕は、それなら夜道も安心とスケジュールを調整していく。

(秋津さんもがんばってるみたいだし、この場は見なかったことにするか)

そういうシャイなところが僕にはある。

買う物を頭の中で具体的に詰めながら、素知らぬ顔でコンビニの自動ドアをくぐる。

ちょうど買い物を終えて出てくる女の子とすれ違いざま軽く会釈すると、びっくりされた。

そのオーバリアクションに、むしろ僕がびっくりだ。

「?」  
「ごめん」

とりあえず謝っておく。

すると女の子は「あ、いえ」と曖昧に言葉を濁して足早に去っていった。

栗色の、明るい色をした髪が印象的な女の子だった。

おそらく同じ年だとは思いますが、学区が異なるのか見覚えはない。

(……それなら、なんでわざわざこのコンビニに?)

一抹の疑問は残ったが、どのみち僕には関係のないことだ。

一度首を振って頭を整理すると、僕は秋津さんと瀬波さんに見つからないよう夜食のパンと乳飲料を迅速にチョイスしてレジに持っていく。

この間、わずか十秒。

待ちくたびれた瀬波さんがレジに誰か並んでいるか確認するまで、あと十秒といったところか? 時間がない。

(悠長にやっってる場合じゃなさそうだな)

僕はすでに取り出している財布から、きっちりお釣りが出ないよう小銭をレジカウンターに置く。あと七秒。

「あと、あんまんをひとつ」

ちい、五秒ロスった。

「レシートは結構です」

購入した商品を受け取り、あとは速やかに撤退するだけだ。勝った

……！

「あれ、みっちー」

「きみには本当にかっかりだよ、委員長」

## 完成の契約者

精神優位種が他星で活動しようとした場合、これは言うまでもないかもしれないが、現地の有機生物にとり憑くのが一番早い。

現在、地球上で曲がりなりにも意思疎通が可能なのは人類だけだから、契約者同士の争いは必然的に人間対人間の構図になる。

今更ではあるが、

(世も末だな)

男はそう独りごちて、夜空を眺めた。

わずかに欠けた月の下、コンビニエンスストアの屋根の上に立っている自分が哀れでならなかった。

身にまとったブランドもののスーツがより一層物悲しさを引き立てている。

見苦しくない程度にセットした髪が、夜風を孕んで一房なびいた。

もう三十路だというのに、地球の平和のために戦っている。それが何より悲しい。

戦うビジネスマン。

ここでは彼を、仮に「バッタ」と呼ぼう。

仲間内では皮肉を込めてそう呼ばれているからだ。

男が見上げた先には、星空を遊泳する人影がひとつ。

バツタにとっては見慣れた光景なのだが、そのたびに彼は思うのだ。

（何故、わざわざ飛ぶ）

優位種的能力は様々だが、大空を自由自在に飛び回れる能力と言えばテレキネシス、つまり念動力と相場が決まっている。

サイコメトラー  
精神感応と並びポピュラーな能力で、そして不名誉にも馬鹿の代名詞とされている。

これは余談だが、能力者に「このテレキネシス野郎！」と言われたら、それは「あなたは学が浅いように思われます」という意味らしい。

同じテレキネシスとして地位向上に努めてきたバツタだが、とりあえず空を飛んでみましたという輩を見るにつけて、自らの努力が無駄であることを思い知らされるようだった。

しかし、幸いにして先方はまだ未成年らしく、更正の余地が残されているように思う。

両者を隔てる距離は肉眼で視認できる範囲を越えていたが、能力の応用に長けるバツタは、微弱な念動力を働かせてレーダーの真似事も出来る。

彼は、少し不安になった。

無意味に上空を旋回している新米契約者が、ひょっとして勝てる気

でないかと心配でならなかったのだ。

とり憑いている猛禽類は見た目にも賢そうだが、その生態上、彼らに輝ける知性を期待することは難しい。

中学生の高学年くらいだろうか、星空を駆ける少年の姿が、不運にも特異型に見初められた（しかもおそらく自覚していない、あるいはできない）少年とだぶって見え、余計に憐れみを誘う。

いらぬ忠告をしてしまったのは、そのせいだ。

『おまえも特異型に引き寄せられた口か？ 悪いことは言わん、やめておけ』

返事はすぐに返ってきた。

『おまえは、何なんだ？』

言葉を運ぶこと程度はできるらしい。他人事ながら、バツタは安堵した。

『おまえと同じ契約者だ。もしくは宿主と説明を受けているかもしれないが……』

本来なら「宿主」というのは侮蔑的な意味合いを含むのだが、当の優位種がその場の気分で言うから侮れない。

少年は警戒しているようだった。

『……本体が見えない。どこにいる？』

「本体」というのは、優位種のビジョンという理解でいいのだろうか。

あまたの能力者を打ち破ってきた歴戦の三十歳は、しばしばこういつたジュネレーションギャップに戸惑う。

（寄生種を本体と呼ぶ、では宿主のおまえは何だと言っただ……？）

ささやかな疑問が浮かぶものの、いったん保留し簡潔に答える。

『力を完全に制御できるなら、そんなものは必要ない』

『そんなもの……？ 駄目だ、おまえは信用できない』

何か誤解しているようだが、優位種のビジョンは振り子作用のようなもので、それそのものに意思や人格が備わっている訳ではない。

とはいえ、そうした虚像と友達感覚で接している契約者が多いことは事実だ。

これは完全にバッタの失策だった。

彼は胸中で舌打ちすると、一転して強気に出た。

『寄生種に何を吹き込まれた？ 特異型に楯突いていっばしのヒーロー気取りか。しびれるぜ、なあおい』

少年の反応は劇的だった。思春期の少年らしい潔癖さで、激情をそのまま叩き付けてくる。

星間連合が定める「能力」の定義とは、「意思に伴い運動する非因果性」だ。

噛み砕いて言うなら、イメージを実現する謎の現象である。

だから、ペンタモールの「擬態」は厳密には「能力」の定義から外れる。

公式文書では伏せられる、彼らの能力の正式名称は、特異一種と同じ確率支配「オールバースデイ」だ。

無音で迫る衝撃波を、バツタは微動だにせず掻き散らす。

たいていのルーキーは、力を飛ばすという認識でしか能力を扱えない。

頭ではわかっているけど、固定観念が邪魔をするからだ。

だが、バツタは違う。

それが純然たる経験の差だった。

「特異型の契約者には手出しません。この俺たちがな」

むしろ厄介なのは、その契約者がコンビニから出てきて（目が合った）、おもむろに携帯電話を取り出したことだった。

星が綺麗だなあ程度のことと言ったかもしれない。

彼の日常を屋根の上から守り続けるバツタは、控えめに見ても通報されておかしくない。

万人に降り注ぐ月明かりが、成人男性のシルエットを優しく照らし出していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6347i/>

---

月には猫が住んでいる

2010年10月11日20時29分発行